岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第408集

稲荷（いなり）遺跡発掘調査報告書

八重畑地区ほ場整備事業関連遺跡発掘調査

花巻地方振興局花巻農村整備事務所
（財）岩手県文化振興事業団
埋蔵文化財センター

稲荷（いなり）遺跡発掘調査報告書

八重畑地区ほ場整備事業関連遺跡発掘調査

序

岩手県内には、旧石器時代の遺跡をはじめとする数多くの埋蔵文化財包蔵地が各地にあり、平成12年度現在でおよそ11,000ヶ所におよぶ遺跡が確認されております。これら先人の残した多くの文化遺産を保存し、後世に伝えていくことは、私たち県民に課せられた大切な責務であります。

一方、広大な面積を有する本県の大部分は山地であり、地域開発にともなう社会資本の充実も重要な一施策であります。このように埋蔵文化財の保護・保存と開発との調和も今日的課題であり、当岩手県文化振興事業団は、埋蔵文化財センター創立以来、岩手県教育委員会の指導と調整のもとに、開発事業によってやむを得ず消滅する遺跡の緊急発掘調査を行い記録保存する措置をとってまいりました。

本報告書は、石鳥谷町八重畑地区ほ場整備事業に関連して、平成13年度に発掘調査を実施した稲荷遺跡の発掘調査結果をまとめたものであります。調査によって、縄文時代の遺構と古代の竪穴住居跡が確認され、当該地域の歴史や周辺の遺跡との関連性を考える上で貴重な資料を提供することができました。この報告書が広く活用され、斯学の研究のみならず、埋蔵文化財に対する理解の一助となれば幸いです。

最後になりましたが発掘調査及び報告書作成にご援助、ご協力賜りました花巻地方振興局花巻農村整備事務所、石鳥谷町教育委員会をはじめとする多くの関係機関、関係各位に深く感謝申し上げます。

平成14年７月

財団法人　岩手県文化振興事業団
理事長　合　田　　武

例　言

1．本報告書は、岩手県稗貫郡石鳥谷町八重畑72番ほかに所在する稲荷遺跡の発掘調査結果を収録したものである。

2．本遺跡の調査は、ほ場整備事業（八重畑地区）に伴い、岩手県教育委員会生涯学習文化課と花巻地方振興局花巻農村整備事務所との協議を経て、財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターが記録保存を目的として行った緊急発掘調査である。

3．岩手県遺跡登録台帳における番号と調査時の遺跡略号は以下の通りである。

　　遺跡番号　　ＭＥ０７－２０７８

　　遺跡略号　　ＩＮ－０１

4．調査期間・調査面積・調査担当者は以下の通りである。

　　調査期間　　平成13年６月18日～平成13年７月31日

　　調査面積　　2,090㎡

　　調査担当者　　村木　敬・星　幸文

5．室内整理期間と整理担当者は、以下の通りである。

　　室内整理期間　平成13年11月１日～平成14年１月31日

　　整理担当者　　星　幸文・村木　敬

6．本報告の執筆・編集は、星幸文が担当した。

7．委託業務にあたっては以下に委託した。（敬称略）

　　基準点測量　　株式会社　協進測量設計

8．土層及び土器の色調観察には農林水産省農林水産技術会議監修の「新版標準土色帖」を参考にした。

9．遺跡の調査成果は、平成13年度分の岩手県埋蔵文化財発掘調査略報に公表したが、本書の内容が優先するものである。

10．野外調査においては、石鳥谷町教育委員会をはじめ多くの地元の方々に、報告書作成においては、多賀城市埋蔵文化財調査センターの石川俊英氏、東北歴史博物館の白崎恵介氏にご協力をいただいた。

11．本遺跡から出土した遺物及び調査にかかわる資料は、岩手県立埋蔵文化財センターに保管してある。

目　次

序
例言

【本文】

Ⅰ．調査にいたる経過 …… 3
Ⅱ．遺跡の位置と環境 …… 3
　1．遺跡の位置 …… 3
　2．遺跡周辺の地形と地質 …… 3
　3．遺跡の基本層序 …… 5
　4．周辺の遺跡 …… 5
　参考引用文献
Ⅲ．調査方法と室内整理 …… 10
　1．野外調査の方法 …… 10
　　(1) グリットの設定 …… 10
　　(2) 粗掘りと遺構検出 …… 10
　　(3) 遺構の精査と実測 …… 10
　　(4) 写真撮影について …… 10
　　(5) 遺物の取り上げについて …… 10
　　(6) 遺構の命名 …… 10
　　(7) 広報活動 …… 10
　2．室内整理の方法 …… 10
　　(1) 作業手順 …… 10
　　(2) 遺構 …… 11
　　(3) 遺物 …… 11
　　(4) 凡例 …… 11
Ⅳ．調査結果 …… 13
　1．調査の概要 …… 13
　2．検出された遺構と出土遺物 …… 13
Ⅴ．まとめ …… 33
　1．出土遺物 …… 33
　2．遺構 …… 36
　参考引用文献
報告書抄録
職員一覧

【図版】

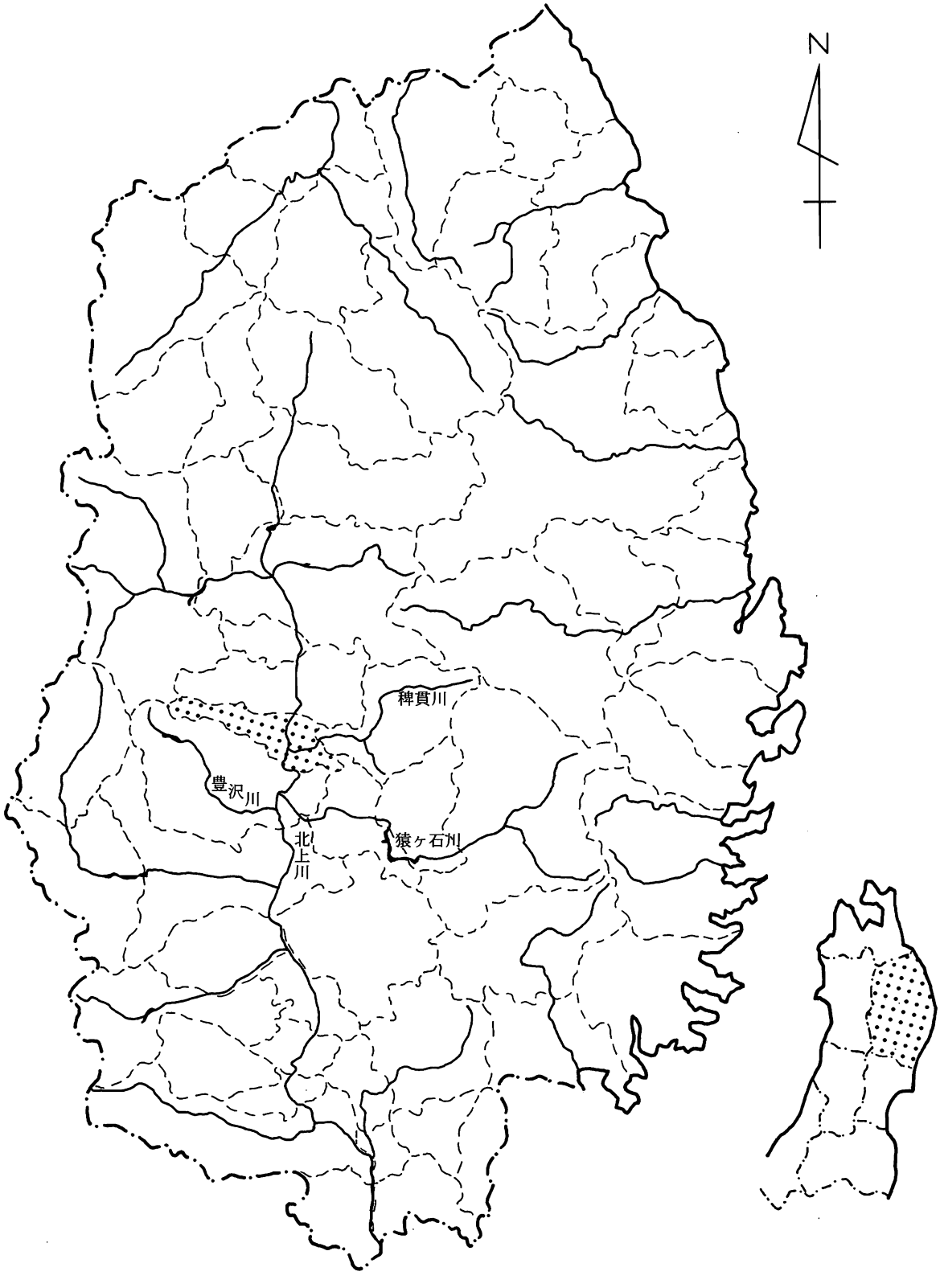
第１図　岩手県全図 …… 1
第２図　遺跡周辺の地形図 …… 2
第３図　遺跡周辺地形分類図 …… 4
第４図　周辺の遺跡分布図 …… 9
第５図　凡例 …… 11
第６図　遺構配置図 …… 12
第７図　１号竪穴住居跡 (1) …… 14
第８図　１号竪穴住居跡 (2) …… 15
第９図　１号竪穴住居跡出土遺物 (1) …… 16
第10図　１号竪穴住居跡出土遺物 (2) …… 17
第11図　１号竪穴住居跡出土遺物 (3) …… 18
第12図　２号竪穴住居跡 (1) …… 19
第13図　２号竪穴住居跡 (2) …… 20
第14図　２号竪穴住居跡出土遺物 …… 21
第15図　３号竪穴住居跡 (1) …… 23
第16図　３号竪穴住居跡 (2) …… 24
第17図　３号竪穴住居跡出土遺物 …… 25
第18図　４号竪穴住居跡 (1) …… 26
第19図　４号竪穴住居跡 (2) …… 27
第20図　４号竪穴住居跡 (3) …… 28
第21図　４号竪穴住居跡 (4) …… 29
第22図　４号竪穴住居跡出土遺物 …… 30
第23図　土坑・陥し穴状遺構 …… 31
第24図　遺構外出土遺物 …… 32
第25図　多賀城跡出土遺物 …… 34

【表】

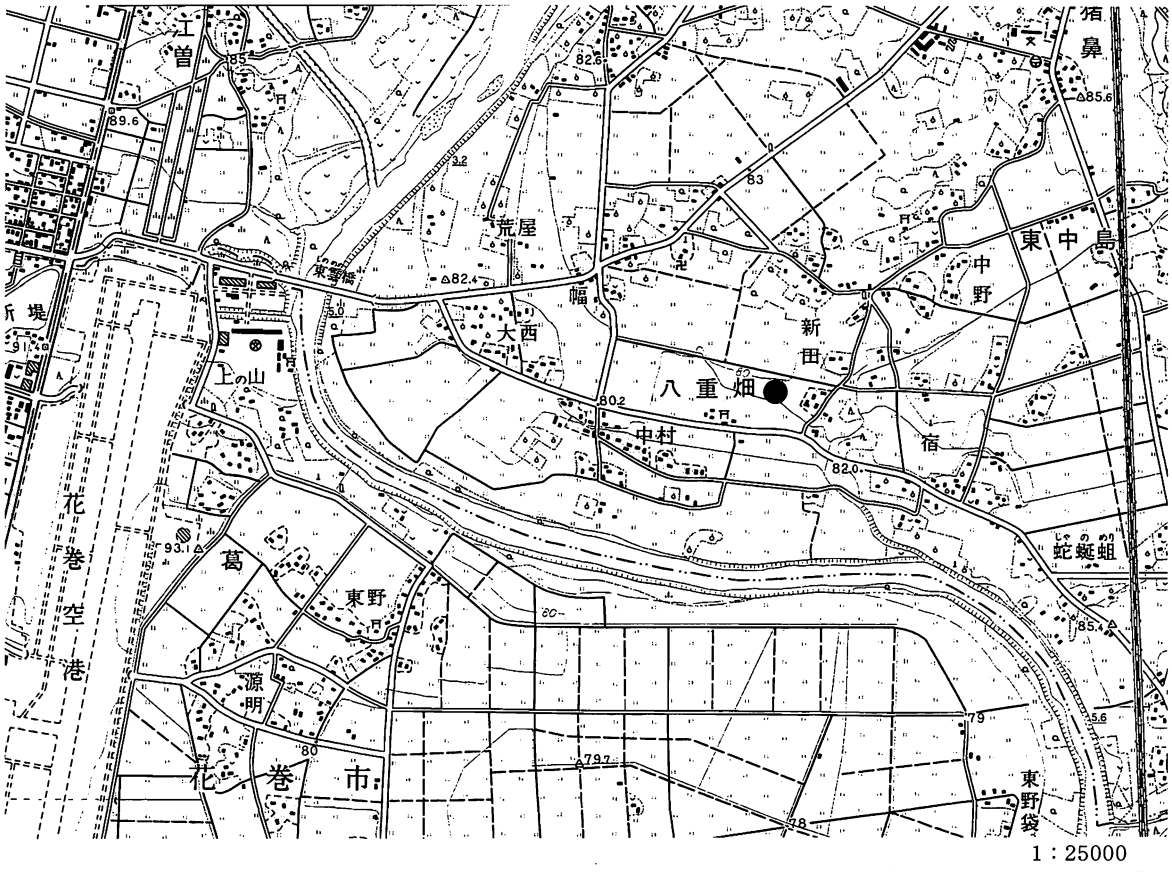
第１表　周辺の遺跡一覧 …… 7
第２表　遺物観察表① …… 39
第３表　遺物観察表② …… 40
第４表　遺物観察表③ …… 40
第５表　遺物観察表④ …… 40
第６表　遺物観察表⑤ …… 40

【写真図版】

写真図版１　調査前風景・調査後風景 …… 43
写真図版２　１号竪穴住居跡 …… 44
写真図版３　１・２号竪穴住居跡 …… 45
写真図版４　２号竪穴住居跡 …… 46
写真図版５　３号竪穴住居跡 …… 47
写真図版６　４号竪穴住居跡・土坑・陥し穴状遺構 …… 48
写真図版７　出土遺物 (1) …… 49
写真図版８　出土遺物 (2) …… 50
写真図版９　出土遺物 (3) …… 51
写真図版10　出土遺物 (4) …… 52



第１図　岩手県全図



第２図　遺跡周辺の地形図

Ⅰ　調査にいたる経過

稲荷遺跡は、ほ場整備事業(担い手育成区画整理型)八重畑地区の実施に伴い、その事業区域内に存することから発掘調査を実施することになったものである。

本事業は、石鳥谷町南東部に位置し平成９年度より進められている、区画整理面積369haを行う事業であり、大区画１haを造成し大型機械による低コスト農業を目指すことはもとより、農地流動化を図り担い手農家を育成し、地域全体として高生産性農業と安定経営を目的としている。

（花巻地方振興局花巻農村整備事務所）

Ⅱ　遺跡の位置と環境

１．遺跡の位置

稲荷遺跡の所在する石鳥谷町は、岩手県のほぼ中央部に位置し、北は紫波郡紫波町、東は稗貫郡大迫町、南は花巻市・稗貫郡東和町、西は岩手郡雫石町の１市４町に接している。東西約49.5km、南北約17.5km、総面積118.57km²の人口1万6千5百人（平成12年）を有する町である。遺跡は第２図に示すようにＪＲ東北本線花巻空港駅の西側約３km、石鳥谷町八重畑に所在し、北上川左岸の河岸段丘上に立地している。国土地理院発行の２万５千分の地形図「石鳥谷」NJ-54-13-16-1（盛岡16号-1）の図幅に含まれ、北緯39度26分5秒、東経141度10分付近にあたる。標高は約80mで、現況は水田及び畑地である。

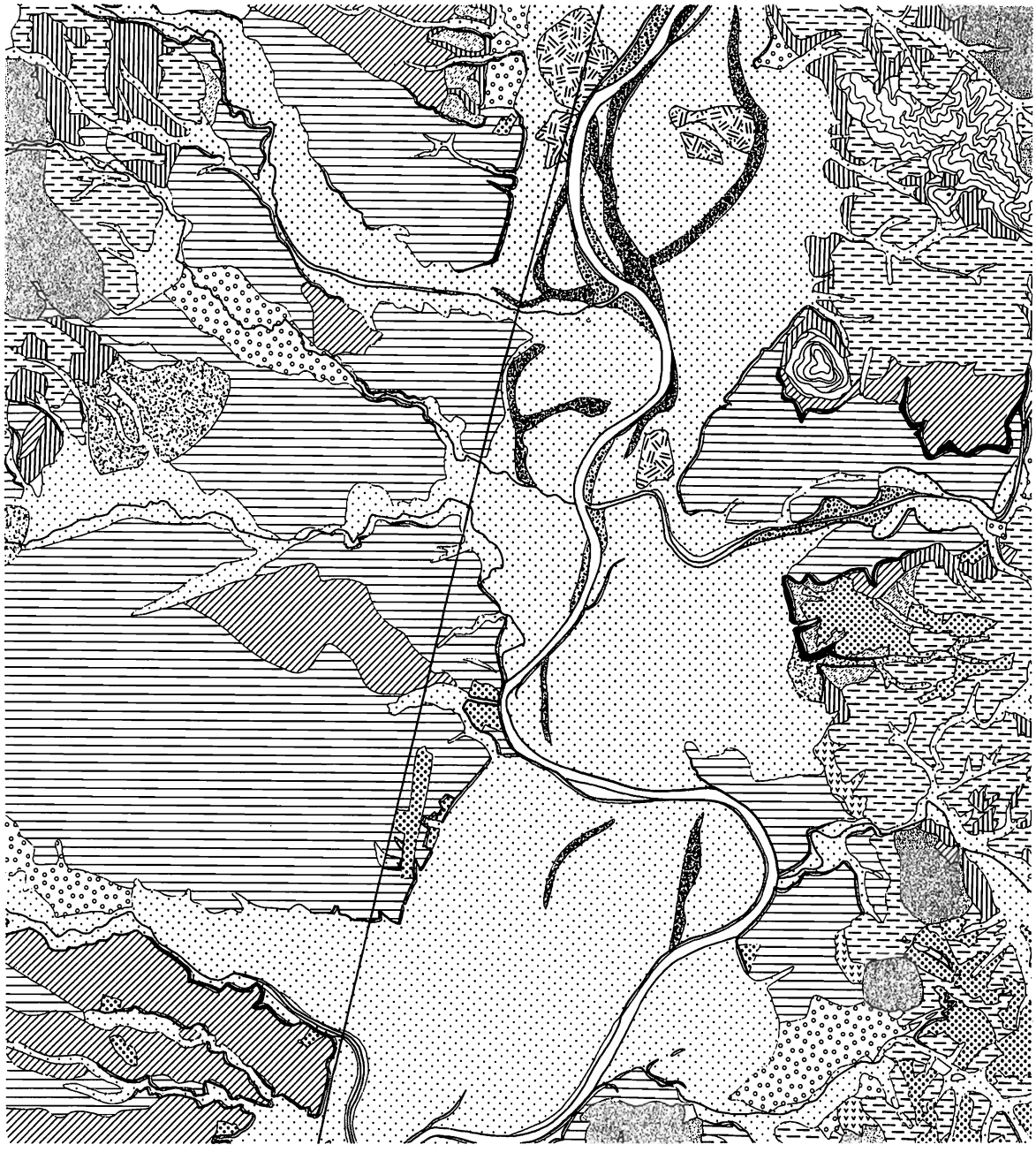
中世には地方豪族である稗貫氏の領地であり、今でも稗貫氏縁の家臣の名が地名として数多く残っている。また、北上盆地の肥沃な穀倉地帯でとれる良質な米と水に恵まれ酒造りが古くから盛んで近世には南部藩の宿場町として栄えた。昭和30年に石鳥谷町、八幡村、新堀村、八重畑村の１町３村が合併し現在の石鳥谷町となっている。酒造業が町の重要な産業であり、岩手の酒どころ、南部社氏発祥の里として知られている。

主要交通機関としては、町の中央部をＪＲ東北本線、国道４号線が通り、南流する北上川を挟んで、東側にはＪＲ東北新幹線が縦断している。

２．遺跡周辺の地形と地質

石鳥谷町は、岩手郡岩手町に源を発する北上川（249km）が、支流の稗貫川、添市川、葛丸川、耳取川、滝沢川と合流して町の東側を蛇行しながら南流し、段丘や谷底平野を形成している。西側に連なる奥羽脊梁山脈と東側に広がる北上山系に挟まれた北上盆地の中央部に位置し、北西側に「南部方富士」と呼ばれる成層火山の岩手山、東側には北上山系最高峰の早池峰山が山稜を望ませている。北上川の右岸では奥羽脊梁山脈に源を発する勾配の急な河川により扇状地の大地が発達している。これに対して左岸では、北上山系に源を発する河川により山地に続く丘陵縁辺部に小規模な段丘と沖積地が比較的広範囲に見られるにすぎない。本遺跡の存在する八重畑地区は稗貫川、添市川に挟まれた北上川が西に張り出した左岸の段丘上に立地している。第３図地形区分図によると、本遺跡の西部に北上川の旧河道跡が見られる。調査した範囲の地形は、中央部が丘状で南北に傾斜しており、旧北上川の影響を受けているものと思われる。

地質は西側の奥羽脊梁山脈東縁部分は、新第三紀のグリーン・タフによる安山岩・流紋岩が砂岩・頁岩を



0　1km

山麓地
及び暖斜面

丘陵地Ⅰ

丘陵地Ⅱ

砂礫段丘Ⅰ

砂礫段丘Ⅱ

砂礫段丘Ⅲ

沖積段丘

扇状地

崖錐性扇状地

谷底平野
及び氾濫平谷

自然堤防

旧河道

河原

人工改変地

崖

第３図　遺跡周辺地形分類図

伴い分布するほか、更新世や第四紀の岩盤層が分布する。東側の北上山系の西縁丘陵地帯では古生層・花崗岩類・蛇紋岩・安山岩・鮮新世の砂岩・頁岩等を基盤とする山地や丘陵が入り組んでいる。

3．遺跡の基本層序

今回調査した地域は、中央部が丘状で南北に傾斜した地形となっており、水田、畑地は耕作の影響を受けていることなどから基本層序は一様には確認できない。以下は耕作等の影響をあまり受けていない調査区東側３Ｂ－３区で観察された層序である。遺構検出面は、調査区北側はⅣ層上部、南側は耕作による削平のためⅣ層下部である。

Ⅰ層：10YR2/2　黒褐色シルト。粘性弱く、しまりやや強い。現在の表土層で畑地の耕作土である。層厚は30cm程である。

Ⅱ層：10YR2/1　黒色シルト。粘性やや弱く、しまりやや強い。耕作土で、層厚は13～14cmである。

Ⅲ層：10YR2/2　黒褐色粘質シルト。粘性やや強く、しまりやや強い。Ⅰ層より黒色が強く、層厚は11cmである。

Ⅳ層：10YR2/3～3/3　暗褐色シルト。粘性やや弱く、しまりやや強い。遺構検出面で層厚は8～10cmである。

Ⅴ層：10YR4/4　褐色シルト。粘性やや弱く、しまりやや強い。層厚は19～21cmである。

Ⅵ層：10YR3/4　暗褐色シルト。粘性やや弱く、しまりやや強い。層厚は3.5cmである。

Ⅶ層：10YR4/4　褐色シルト。粘性はなく、しまりやや弱い。砂質層で上層より黄色が弱い。層厚は8cmである。

Ⅷ層：10YR3/4　暗褐色シルト。粘性、しまり共やや弱い。層厚は4cmである。

Ⅸ層：10YR4/4　褐色粘質土。粘性強く、しまりやや強い。層厚は8cmである。

Ⅹ層：10YR5/4　にぶい黄褐色シルト。粘性やや弱く、しまりやや強い。層厚は7cmである。

Ⅺ層：10YR4/4　褐色粘質土。粘性強く、しまりやや強い。層厚は3cmである。

Ⅻ層：10YR3/4～4/4　にぶい黄褐色シルト。粘性やや弱く、しまりやや強い。厚さは34～37cmである。

ⅩⅢ層：10YR3/4～4/4　にぶい黄褐色土。砂礫層。

4．周辺の遺跡

岩手県教育委員会のまとめによると、平成11年１月現在で県内には約10,800ヶ所の遺跡が確認されている。そのうち石鳥谷町内には187ヶ所の遺跡が、また、第４図の南に位置する花巻市では280ヶ所の遺跡が登録されている。本遺跡が所在する八重畑地区を中心とするその近隣地区には、本遺跡とほぼ時代を同じくする遺跡（古代の遺跡）が103ヶ所確認されており、その遺跡の大部分は北上川及びその支流の河川が形成した段丘縁や低地に立地している。

石鳥谷町内で発掘調査された遺跡は、昭和40年代半ばまでは、五大堂長沢遺跡（縄文晩期、1949年）、大瀬川田屋遺跡（縄文中期、1968年）が発掘された程度で、発掘事例の少ない地域であった。しかし、東北新幹線建設に伴う高畠遺跡（縄文中期、1974年）、大明神遺跡（弥生・平安時代、1974年）、大曲遺跡（平安時代、1974年）、幅遺跡（1974年）、東北縦貫自動車道建設に伴う大地渡遺跡（縄文中期・平安時代、1974年）、大瀬川Ａ遺跡（縄文中期・平安時代、1974年）、大瀬川Ｂ遺跡（中世、1973年）、大瀬川Ｃ遺跡（中世館跡、1974年）、野田遺跡（1973年）、上台遺跡（平安時代、1974年）、河川改修に伴う五大堂安堵屋

敷遺跡（縄文晩期、1980年)、アイスアリーナ建設に伴う白幡林遺跡（縄文・平安・近世、1994年)、国道４号石鳥谷バイパス関連事業及び、農道整備事業に伴う小森林館跡（縄文・平安・中世、1982・1997年)など発掘調査が進み、縄文時代から中世にかけての歴史が明らかになってきた。今年度は本遺跡の他、同町内では島岡Ⅱ遺跡の発掘調査も行われ、平安時代の住居跡、近世の水路跡を確認している。

＜参考・引用文献＞

石鳥谷町教育委員会「石鳥谷町史　上巻」石鳥谷町

石鳥谷町教育委員会「石鳥谷町史　下巻」石鳥谷町

岩手県（1971）　「北上山系開発地域土地分類基本調査　花巻」

（財）岩手県埋蔵文化財センター（1984）：「小森林館跡発掘調査報告書」岩埋文調査報告書第73集

（財）岩手県埋蔵文化財センター（1984）：「安堵屋敷遺跡発掘調査報告書」埋文調査報告書第74集

（財）岩手県埋蔵文化財センター（1997）：「小森林館跡発掘調査報告書」岩埋文調査報告書第280集

稗貫氏探訪八００年記念実行委員会（平成７年）：「稗貫氏探訪」稗貫氏八百年顕彰記念誌

(石鳥谷町)

第１表　周辺の遺跡一覧

No.	遺跡名	種別	時代等／備考
1	長善寺Ⅱ	散布地	縄文・古代／縄文土器、土師器、須恵器
2	島	集落跡	平安／土師器、須恵器
3	沼の欠	散布地	平安／土師器、須恵器
4	上和町Ⅰ	散布地	縄文・古代／縄文(後期)、土師器、須恵器
5	上沢田Ⅰ	散布地	縄文・古代／縄文土器、土師器
6	上沢田Ⅱ	散布地	縄文・古代／縄文土器、土師器
7	白幡林古墳	古墳	古墳／古墳
8	北向古墳群	古墳群	古墳／
9	八日市	散布地	縄文・古代／縄文(後期)、土師器、須恵器
10	光林寺館	城館跡・散布地	縄文・古代・中世／縄文(後期)、土師器、須恵器、堀
11	大興寺Ⅰ	散布地	古代／須恵器
12	大興寺Ⅱ	散布地	古代／土師器口縁部
13	塚原	集落跡	縄文・古代／縄文土器、土師器、須恵器、住居跡
14	内御堂	散布地	縄文・平安／縄文土器、土師器
15	宇洞	散布地	縄文・古代／縄文(中期)、土師器、須恵器
16	保沢川	散布地	平安／土師器、須恵器
17	久保Ⅰ	散布地	平安／土師器、須恵器
18	久保Ⅱ	散布地	平安／土師器、須恵器
19	久保Ⅲ	散布地	平安／土師器、須恵器
20	明戸Ⅰ	散布地	縄文・古代／縄文土器、土師器、須恵器
21	明戸Ⅱ	散布地	縄文・古代／縄文土器、土師器
22	明戸Ⅲ	散布地	平安／土師器
23	明戸Ⅳ	散布地	平安／土師器、須恵器
24	番屋	散布地	古代／土師器
25	島岡Ⅰ	散布地	縄文・古代／縄文土器、土師器
26	島岡Ⅱ	散布地	平安・近世／土師器、須恵器、水路跡
27	種森	散布地	平安／土師器、須恵器
28	幅	散布地	縄文・平安／縄文土器、土師器、須恵器
29	幅欠	散布地	縄文・平安／縄文土器、土師器、須恵器
30	野沢川Ⅰ	散布地	縄文・平安／縄文土器、土師器、須恵器
31	野沢川Ⅱ	散布地	縄文・平安／縄文(後期・晩期)、土師器、須恵器
32	百目木	散布地	縄文・平安／縄文(後期)、土師器
33	大曲	散布地	平安／土師器、須恵器
34	上野々	散布地	縄文・平安／縄文土器、土師器、須恵器
35	上十日市	散布地	平安／土師器
36	志登計	散布地	縄文・古代／縄文土器、土師器
37	戸塚蟹沢	散布地	縄文・古代／縄文土器(晩期)、土師器
38	硯石	散布地	縄文・古代／縄文土器、須恵器
39	長石	散布地	縄文・平安／縄文土器、土師器、須恵器
40	滝田笹原	散布地	縄文・平安／縄文土器、土師器、須恵器、石器
41	蟹沢Ⅰ	散布地	縄文・古代／縄文土器、土師器
42	戸塚笹原	散布地	縄文・古代／縄文土器、土師器
43	蒲沢	散布地	縄文・古代／縄文土器、土師器
44	端館	散布地・城館跡	平安・中世／土師器、須恵器
45	下十日市古墳群	古墳群	古墳／古墳
46	塚の森Ⅰ	散布地	縄文・平安／縄文土器、土師器、須恵器
47	塚の森Ⅱ	散布地	平安／土師器
48	七ツ森古墳群	散布地・古墳群	縄文・古墳／縄文土器、古墳、土師器
49	七ツ森	散布地	縄文・古代／縄文土器、土師器
50	貝の淵Ⅰ	散布地	縄文・古代／縄文土器、土師器
51	猪鼻	散布地	縄文・古代／縄文土器、土師器
52	猪鼻Ⅱ	散布地	古代／須恵器

No.	遺跡名	種別	時代等／備考
53	下館Ⅱ	散布地	古代／土師器
54	関口	散布地	古代／土師器
55	関口	散布地	古代／土師器、須恵器
56	滝田歳の神	散布地	縄文・古代／縄文土器、土師器
57	大川原館	散布地・城館跡	縄文・古代／縄文土器、土塁、堀
58	曲谷地	散布地	縄文・平安／縄文土器、土師器、須恵器
59	見山	散布地	古墳　縄文・古墳／縄文土器
60	見山古墳群	古墳群	古墳／古墳
61	反町	古墳群・祭祀跡	縄文・古墳／縄文土器、古墳、住居跡
62	滝田硯石	散布地	平安／土師器
63	稲荷	集落跡	縄文・古代／縄文土器、土師器、須恵器、刀子、鉄滓
64	荒野	散布地	古代／土師器
65	宿	集落跡	縄文・古代／縄文土器、土師器
66	蛇蜒蛆	散布地	平安／土師器
67	沢流	散布地	縄文・古代／縄文土器、土師器
68	安堵屋敷	散布地	縄文・古代／縄文土器、土師器

（花巻市）

69	佐渡川古墳群	古墳群	古墳／円墳、土師器
70	宮野目方八丁	城館跡	平安／住居跡、土師器、須恵器、鉄器、堀
71	上ノ山	散布地	縄文・古代／縄文土器
72	上ノ山	城館跡・散布地	古代～中世／堀、縄文(前・中期)、石器、土師器、須恵器
73	源明Ⅰ	散布地	平安／須恵器
74	源明Ⅱ	散布地	古代／土師器
75	葛	散布地	縄文・平安／縄文土器、土師器
76	ME16-1069	散布地	縄文・平安／縄文土器、土師器、須恵器
77	十三塚	祭祀跡	／塚、古銭
78	三岳	散布地	古代／土師器
79	石持Ⅰ	散布地	古代／土師器
80	石持Ⅱ	散布地	古代／土師器
81	馬立Ⅰ	散布地	平安／土師器
82	馬立Ⅱ	散布地	平安／土師器
83	田力中野	散布地	縄文・平安／縄文土器、土師器
84	添市古墳群	古墳群	古墳
85	東野袋	散布地	古代／土師器
86	庫理	散布地	縄文・古代／縄文土器、土師器
87	矢沢古堂	集落跡	古代／土師器、須恵器、鉄製品
88	上幅	集落跡	縄文・古代／石器、縄文土器、竪穴住居
89	下幅	散布地	古代・平安／土師器、竪穴住居、須恵器
90	ME27-0221	散布地	古代／土師器・須恵器
91	矢沢八幡	集落跡・城館跡	平安・近世／竪穴住居、掘立柱跡、土師器、須恵器、古銭
92	経塚森	経塚	古代／土師器、塚
93	寺場	集落跡	古代／竪穴住居跡、土師器、須恵器
94	ME16-2364		古代／土師器
95	似内	集落跡	古代／土師器、須恵器
96	上似内	散布地	古代／土師器、須恵器
97	ME26-0233	散布地	古代／土師器
98	下似内	散布地	古代／土師器、須恵器
99	下東	散布地	古代／土師器、須恵器
100	胡四王山館	城館跡	平安／縄文土器、土師器、須恵器、空濠
101	槻ノ木Ⅲ	散布地	縄文・古代／縄文土器、石器、土師器、須恵器
102	高松Ⅱ	散布地	縄文・弥生・平安／縄文土器(晩期)、弥生土器、土師器
103	堰袋Ⅱ	散布地	古代／土師器、須恵器、土錘

第４図　周辺の遺跡分布図

Ⅲ　調査方法と室内整理

1．野外調査の方法

（1）グリットの設定

グリットの設定にあたっては、平面直角座標の第Ｘ系のＹ＝28,710,000線上に載る基準点１・２を設定し、この２点間を見通す直線と基準点を通り、これに直行する直線を座標の基軸線とした。基軸点１を原点として一辺25mの大グリットを設定した。このグリットの北西端を基準として南北方向の北からⅠ・Ⅱ・Ⅲ・・・・・・の番号を付し、東西方向の西からＡ・Ｂ・Ｃ・・・・・・アルファベットを付した。さらに大グリットを25等分した５mメッシュの小グリットに区割りし、大グリットはＩＡ、小グリットはＩＡ１ａというように呼称した。

基準点１（ⅡＡ１ｅ）	Ｘ＝-62,670.000	Ｙ＝28,710.000	Ｈ＝79.082
基準点２（ⅢＡ４ｅ）	Ｘ＝-62,710.000	Ｙ＝28,710.000	Ｈ＝78.965
補 点 １（ⅡＢ１ｂ）	Ｘ＝-62,670.000	Ｙ＝28,720.000	Ｈ＝79.216
補 点 ２（ⅡＡ４ｅ）	Ｘ＝-62,685.000	Ｙ＝28,710.000	Ｈ＝79.270
補 点 ３（ⅡＢ４ｂ）	Ｘ＝-62,685.000	Ｙ＝28,720.000	Ｈ＝79.327
補 点 ４（ⅢＢ４ｂ）	Ｘ＝-62,710.000	Ｙ＝28,720.000	Ｈ＝78.934

（2）粗掘りと遺構検出

検出面の深さと層序の確認のため調査区に5ヶ所のトレンチを設定し、土層・遺物の出土状況・検出面を確認し、重機による粗掘りを行った後、鋤簾・両刃鎌を用いて遺構検出を行った。

（3）遺構の精査と実測

検出された遺構は、竪穴住居跡は４分法、土坑類については２分法で精査し、必要に応じて使い分けた。遺構の平面図および調査区は、遣り方測量と平板測量を用いて行った。実測図は竪穴住居跡、土坑類は1/20、竪穴住居内のカマド施設は1/10、それ以外は1/40で適宜作成した。

（4）写真撮影について

写真撮影は35mm判カメラ２台（モノクロ、カラー・リバーサル）を使用し、適宜調査前の調査区、遺構の完掘状況、遺構の断面、遺構の埋土状況等の撮影を行った。

（5）遺物の取り上げについて

遺構内の出土遺物については、埋土、床面に分けて取り上げた。遺構外出土遺物については、一部を除き一括して取り上げた。

（6）遺構の命名

検出された遺構の命名については、種別毎に野外調査中の精査順に通し番号で１号竪穴住居跡、２号竪穴住居跡等と付している。

（7）広報活動

埋蔵文化財に対する啓蒙活動の一環として平成13年７月26日に調査成果を公開する現地説明会を開催している。

2．室内整理の方法

（1）作業手順

室内整理は、遺物の水洗、出土地点を注記することから始め、遺物の仕分け、接合・復元、拓本作成、写真撮影、実測、遺物実測図のトレースの順に行った。遺構の実測図については点検・合成の後にトレースを行い、図版・写真図版の作成を順次進めた。

（2）遺構

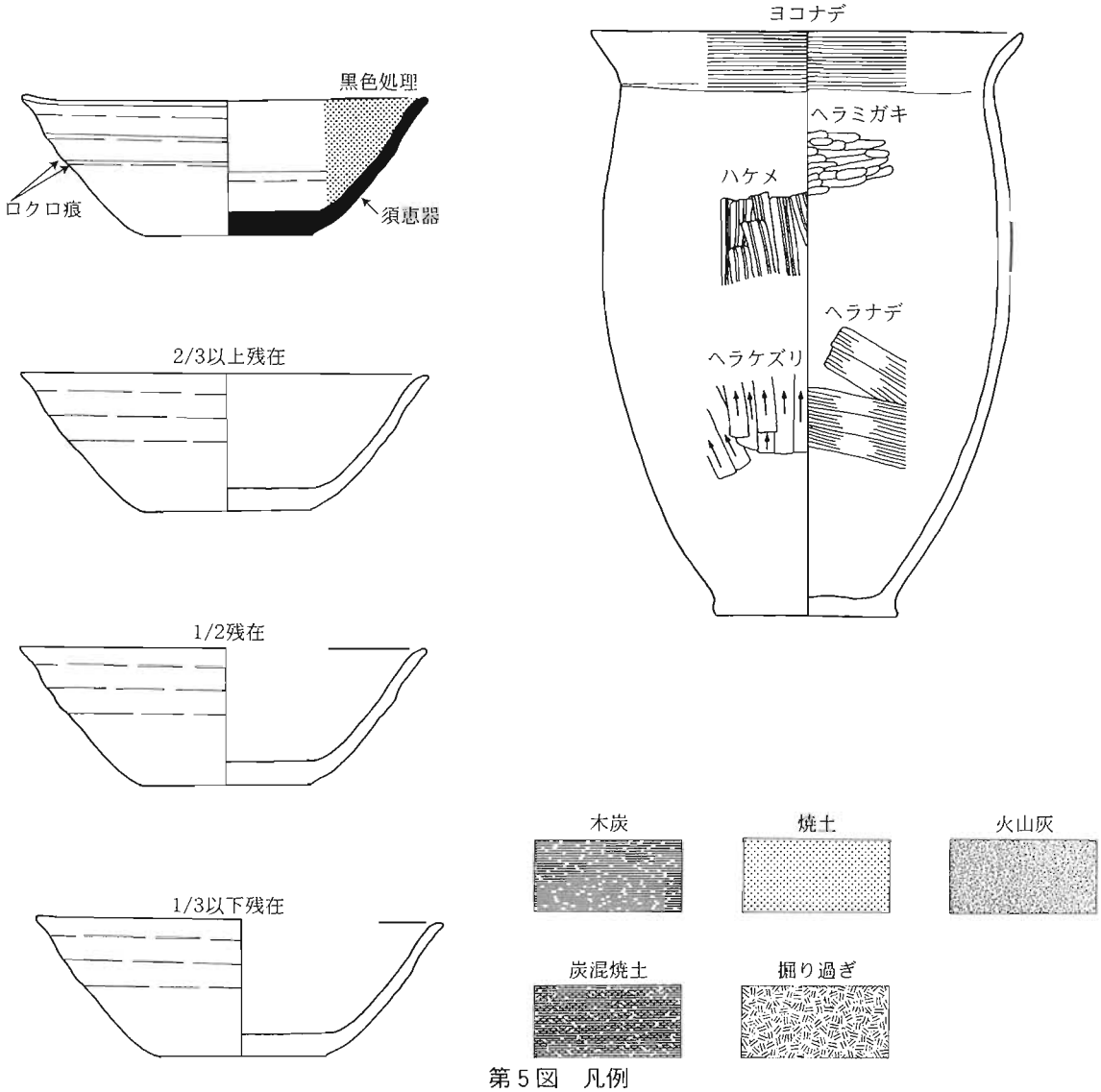
遺構配置図は、発掘調査時に作成した実測図を基に１／200の縮尺図を作成し、１／400で掲載している。各遺構図版の縮尺は、規模により1/20、1/30、1/40、1/60を用いそれぞれにスケールを付している。

（3）遺物

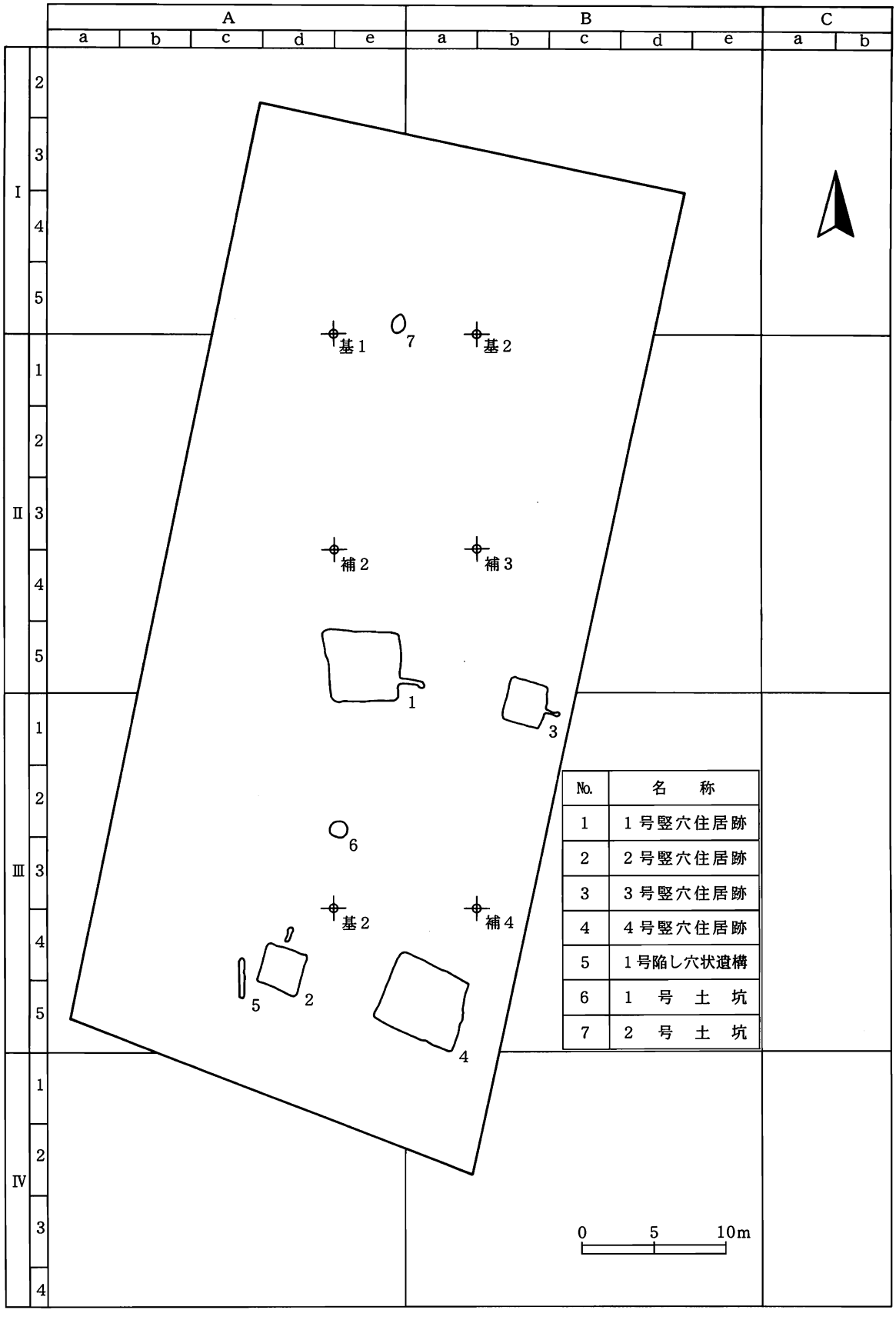
遺物図版については、概ね住居跡毎に床面、埋土の順に掲載している。掲載遺物の実測図は土器が1/3、石器2/3、鉄製品1/2、を原則とし、図版ごとにスケールを付してある。写真図版については土器1/3、石器2/3、鉄製品は1/3を原則としているが、それぞれに異なっているものもあり、その際には個々に縮尺を明記している。

（4）凡例

土器はＰ、石はＳで図示し、土器の調整技法及びスクリントーン等の表現は以下に示すとおりである。



第５図　凡例



No.	名　称
1	1号竪穴住居跡
2	2号竪穴住居跡
3	3号竪穴住居跡
4	4号竪穴住居跡
5	1号陥し穴状遺構
6	1　号　土　坑
7	2　号　土　坑

第6図　遺構配置図

Ⅳ　調査結果

1．調査の概要

今回の調査で検出した遺構は、竪穴住居跡４棟（奈良時代１棟、平安時代３棟）、土坑２基、陥し穴状遺構１基である。

出土遺物は、縄文土器、土師器、須恵器片、石器、鉄滓、刀子である。

2．検出された遺構と出土遺物

（1）１号竪穴住居跡（第７～11図、写真図版２・３・７・８図）

＜位置・検出状況＞　ⅡＡ５ｅグリットにおいて、Ⅲ層を除去したⅣ層上面で方形のプランを検出した。

＜平面形・規模＞　規模は長軸5.24m、短軸4.91mで、平面形は歪みのある隅丸方形を呈している。

＜埋土＞　15層に大別される。上層は黒褐色土主体、下層は暗褐色土の含有が多い。同じ層でも南北側と東西側では混入物の割合に若干の違いが見られる。堆積の状況は自然堆積である。

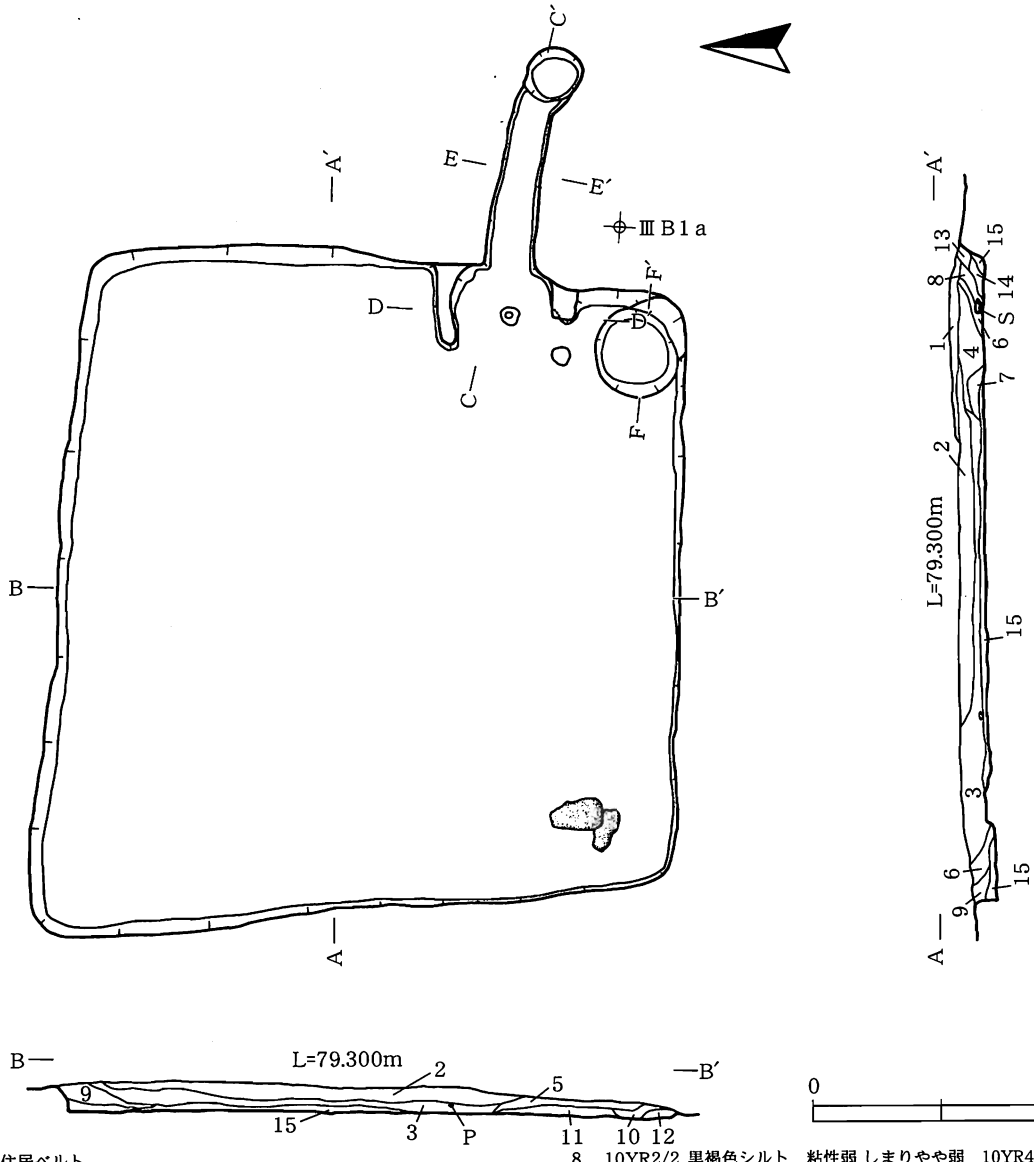
＜壁・床＞　床面から急傾斜で立ち上がっている。壁高は東壁20cm、西壁18cm、南壁6cm、北壁21cmである。南壁は削平されている。

床はほぼ平坦である。南壁側を除く床面には、壁に沿うようにコの字状の貼り床が施されている。幅は北壁側で約1m、東壁側で1.70m、西壁側では1.20m、深さは10cm程である。粘性のやや強い10YR2/1黒色シルトと10YR4/4褐色シルトの混合土である。

＜土坑＞　貼り床の精査中に、カマド右脇の床面に薄い黒色のプランとして検出した。規模は長軸70cm、短軸64cm、深さ36cmである。埋土は６層に細分され、黒褐色を主体とした自然堆積の様相を呈している。土坑内から土器を出土している。

＜カマド＞　東壁の中央部より南寄りに位置する。袖部は左側で長さ65cm、幅16cm、右側が長さ61cm、幅15cmを呈する。右袖部は途中破損しており、残存はあまり良くない。燃焼部は径65×45cmの楕円形で、中央には支脚として使われていた土師器の甕が伏せた状態で出土している。煙道は長さ1.6m、幅30cm、底面は平坦で緩やかに傾斜し、煙出し部へ続く。煙出し部は45×41cm、深さ30cmの規模で、ほぼ円形を呈する。

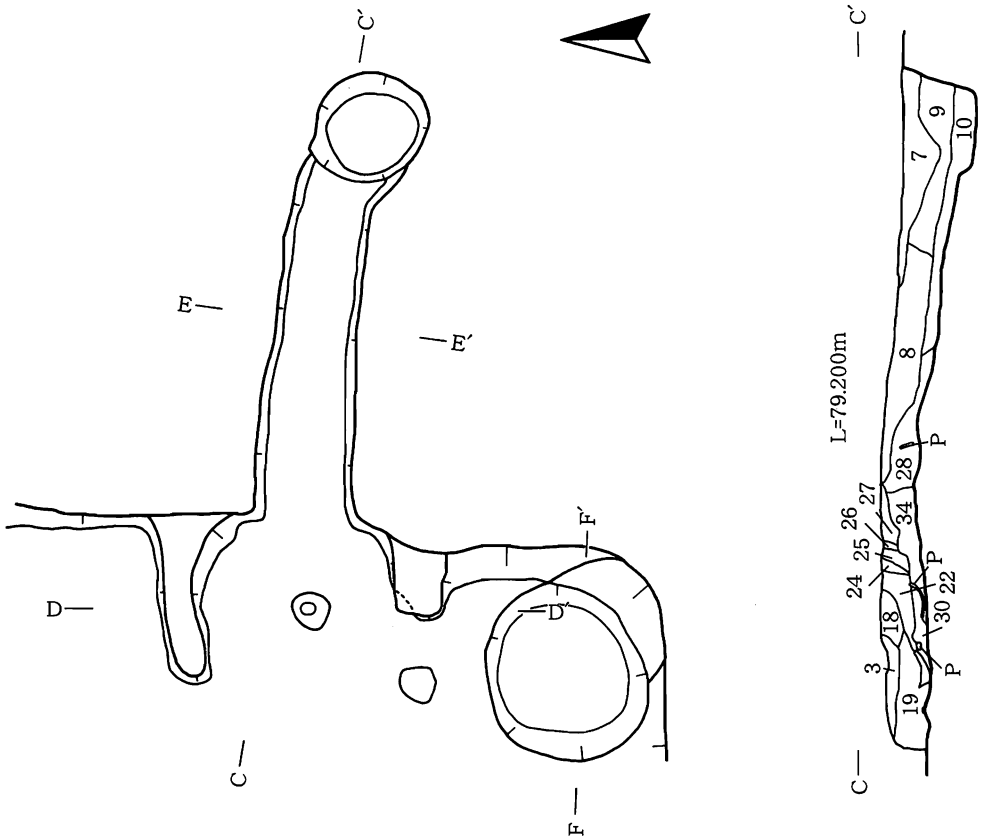
＜出土遺物＞　住居内遺構及び埋土中から土師器の坏（１～３）、甕（４～８）、鉢（９）、鉄製品（12）、鉄滓（13～15）、土製品、縄文土器（10・11）が出土した。破片は接合等によって器種の分かるもののみ掲載している。不掲載のものの中にはカマド及び埋土中から縄文晩期の土器片、両面に黒色処理とミガキの施されている小型甕と思われる土師器片、土製品等がある。坏は内面のみ黒色処理されているものと、内面外面共に黒色処理されているものがある。２と３のヘラミガキ調整は放射状に施されている。甕は小型のものはロクロ使用、長胴のものはロクロ未使用である。４はカマド燃焼部から出土した支脚として用いられていたものである。胴部は底部より緩やかに内湾し、胴部上部に最大径を持つ。口縁部は短く、体部からゆるやかに外傾し口唇部は斜めに立ち上がる。底部にはヘラによる再調整が施されている。５の長胴甕は、胴部がゆるやかに内湾し体部中央に最大径を持ち、口縁部は胴部より外傾し、口唇部付近にわずかに膨らみをもつ。また、口唇部中央に窪みが見られる。ふきこぼれと思われる炭化物の付着がある。６は体部中央部に最大径をもち、頸部は胴部上部から直に立ち上がり、口縁部はそこからやや外反する。７は胴部がゆるやかに内湾している。６・７は共に土坑から出土しており、胎土、調整が類似していることから同一の甕の可能性が強

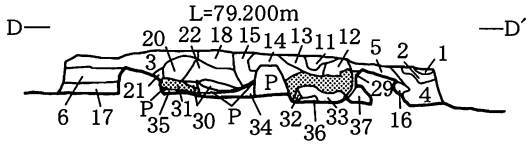


1号住居ベルト
1．10YR2/2 黒褐色シルト　粘性弱　しまり強 現代の耕作土
2．7.5YR3/2 黒褐色シルト　粘性弱　しやりやや弱
3．10YR3/1 黒褐色シルト　粘性弱　しまりやや弱　酸化鉄及び黄褐色砂質シルト含む
4．7.5YR3/1 黒褐色シルト　粘性弱　しまりやや強　黄褐色砂質シルト3層より多く含む
5．10YR3/3 暗褐色粘質シルト　しまりやや強　酸化鉄含む
6．7.5YR3/1 黒褐色シルトと10YR4/4褐色シルトの混合土　ともに粘性弱
7．10YR3/1 黒褐色シルト　粘性弱　しまりやや弱　黄褐色シルト含む
8．10YR2/2 黒褐色シルト　粘性弱 しまりやや弱　10YR4/4褐色シルトわずかに含む　上部褐色ブロック含む
9．10YR2/2 黒褐色シルト　6、8層の混合土
10．10YR2/1 黒色シルト　粘性弱　しまりやや強　暗褐色シルト含む
11．10YR3/4 暗褐色シルト　粘性弱 しまりやや弱　12層と似ているが10YR2/1黒色シルトの含有が12層より多く、20％含む
12．10YR3/4 暗褐色シルト　粘性弱 しまり強　壁面の崩落土　黒色土をシミ状に含む
13．10YR2/1 黒褐色シルト　粘性弱　しまりやや弱
14．10YR1.7/1 黒色シルト　粘性弱　しまりやや弱　暗褐色土がまばらに混じる
15．10YR4/3 にぶい黄褐色シルト　粘性やや強　焼土及び炭化物を含む　3層との境界から土器片が出土

第7図　1号竪穴住居跡(1)

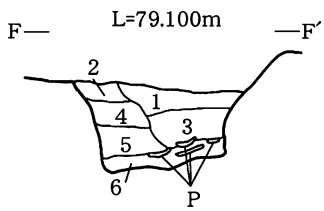
いが、接合面がなく断定できないので別物として扱った。8は体部、口縁部共ゆるやかなに内湾し、口唇部に膨らみを持ち、最大径を胴部やや上部と口唇部に持つ。9の鉢は、胴部外面には叩き目痕が見られる。胴部は内湾し、頸部に段を有し、口縁部は外傾し口唇部にかけて膨らみを持ち、口唇部中央はわずかに窪んでいる。外面体部上部にススの付着が見られる。10・11は流れ込みの縄文土器で、文様から後期から晩期に属するものである。12の刀子と13～15の鉄滓は、埋土下層からまとまって出土している。鉄滓は4点出土しているが1点は掲載をしていない。また、細片のため掲載していないが、中央に穿孔を持つ土製品1点が出土している。残存部は半円形で紡錘車に似てはいるが、小型であるため用途等については不明である。





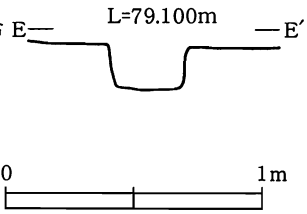
1号住かまど

1．10YR3/3 暗褐色土　粘性なし　しまり強　黄褐色土含む
2．10YR4/3 にぶい黄褐色シルト　粘性なし　しまり強 黄褐色土含む
3．7.5YR3/1 黒褐色シルト　粘性弱　しまり強
4．10YR3/3 暗褐色粘質シルト　粘性やや強　しまりやや強　黄褐色土をすじ状に含む
5．10YR3/3～2/3　暗褐色から黒褐色シルト　粘性弱　しまりやや強　黄褐色土含む
6．7.5YR3/1 黒褐色シルト　粘性弱　しまりやや強　褐色土含む
7．10YR2/2～2/3　黒褐色粘質シルト　粘性やや強　しまりやや弱　東側に褐色土ブロックわずかに含む
8．10YR1.7/1 黒色シルト 粘性やや弱 しまりやや弱
9．10YR2/1 黒色粘質シルト 粘性やや強 しまりやや弱 褐色土及び焼土ブロックわずかに含む
10．10YR4/3 にぶい黄褐色粘質土 粘性強 しまり弱 褐灰土(黒褐色土？)わずかに含む
11．10ＹＲ2/2～2/3 黒褐色シルト 粘性弱 しまりやや強 焼土ブロック含む
12．10ＹＲ3/3　暗褐色シルト 粘性やや弱 しまりやや強
13．10YR4/2～4/3　灰黄褐色からにぶい黄褐色シルト 粘性なし　しまりやや強
14．10YR3/3 暗褐色シルト 粘性やや弱 しまり強 にぶい黄褐色ブロック含む
15．7.5YR2/3 極暗褐色シルト 粘性やや弱 しまり強 焼土ブロック多量に含む
16．10YR2/2 黒褐色シルト 粘性弱 しまりやや弱 黄褐色土含む
17．10YR2/3 黒褐色シルト　粘性やや弱　しまりやや弱　焼土ブロックわずかに含む
18．10YR2/2 黒褐色シルト　粘性弱　しまりやや弱
19．10YR2/1 黒色シルト　粘性弱　しまり強　褐色土含む
20．10YR3/1～3/2 黒褐色シルト　粘性弱　しまり強
21．10YR2/2 黒褐色シルト　粘性やや弱　しまりやや弱
22．10YR2/2 黒褐色シルト　粘性弱　しまりやや弱　焼土ブロック3%含む
23．5YR4/4　にぶい赤褐色焼土　粘性やや弱　しまりやや弱
24．10YR2/3 黒褐色シルト　粘性やや弱　しまり弱　焼土ブロック含む
25．7.5YR3/4 暗褐色シルト　粘性やや弱　しまり弱　褐色シルト及び焼土ブロック含む
26．10YR4/4 褐色シルト　粘性なし　しまり強
27．5YR3/2　暗赤褐色シルト　粘性やや弱　しまりやや弱　焼土ブロック含む
28．7.5YR2/3 極暗褐色シルト　粘性やや弱　しまりやや弱　焼土含む
29．10YR3/3 暗褐色シルト　粘性弱　しまりやや強　焼土わずかに含む
30．10YR3/3～2/3 暗褐色から黒褐色シルトの混合土　粘性やや弱　しまりやや弱　焼土含む
31．5YR3/6　暗赤褐色焼土　粘性なし　しまりやや弱　砂土含む
32．5YR4/6　赤褐色焼土　粘性やや弱　しまりやや強
33．7.5YR3/2 黒褐色粘質土　粘性強　しまりやや弱　焼土ブロック多量に含む
34．7.5YR3/2 黒褐色シルト　粘性強　しまりやや弱　大きめの焼土ブロックを全体に含む
35．10YR2/3 黒褐色シルト　粘性やや弱　しまりやや弱　焼土ブロックわずかに含む
36．7.5YR3/2 黒褐色シルト　粘性やや弱　しまり弱　焼土を層状に含む
37．10YR2/3 黒褐色シルト　粘性やや弱　しまりやや弱

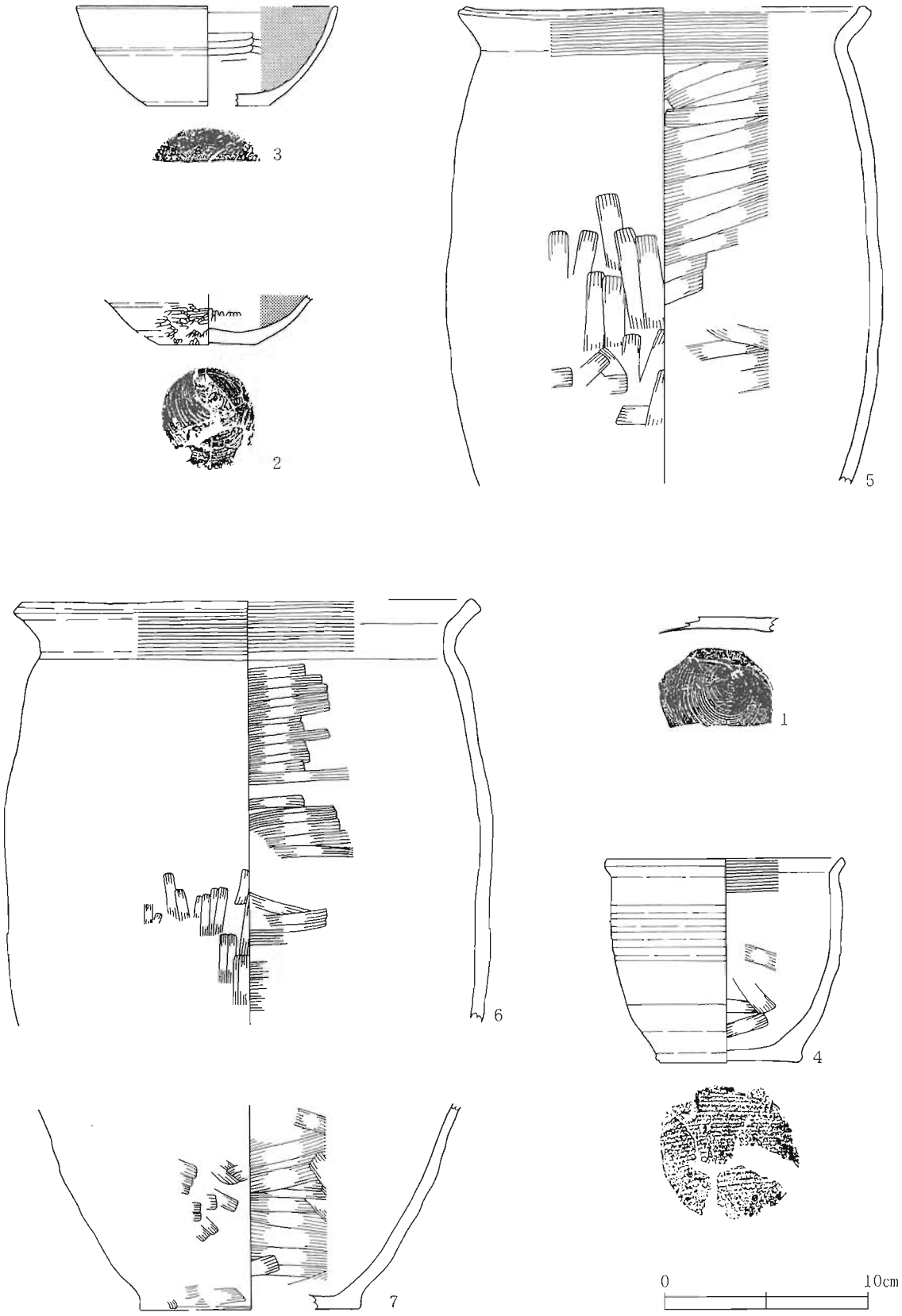


1号住土坑

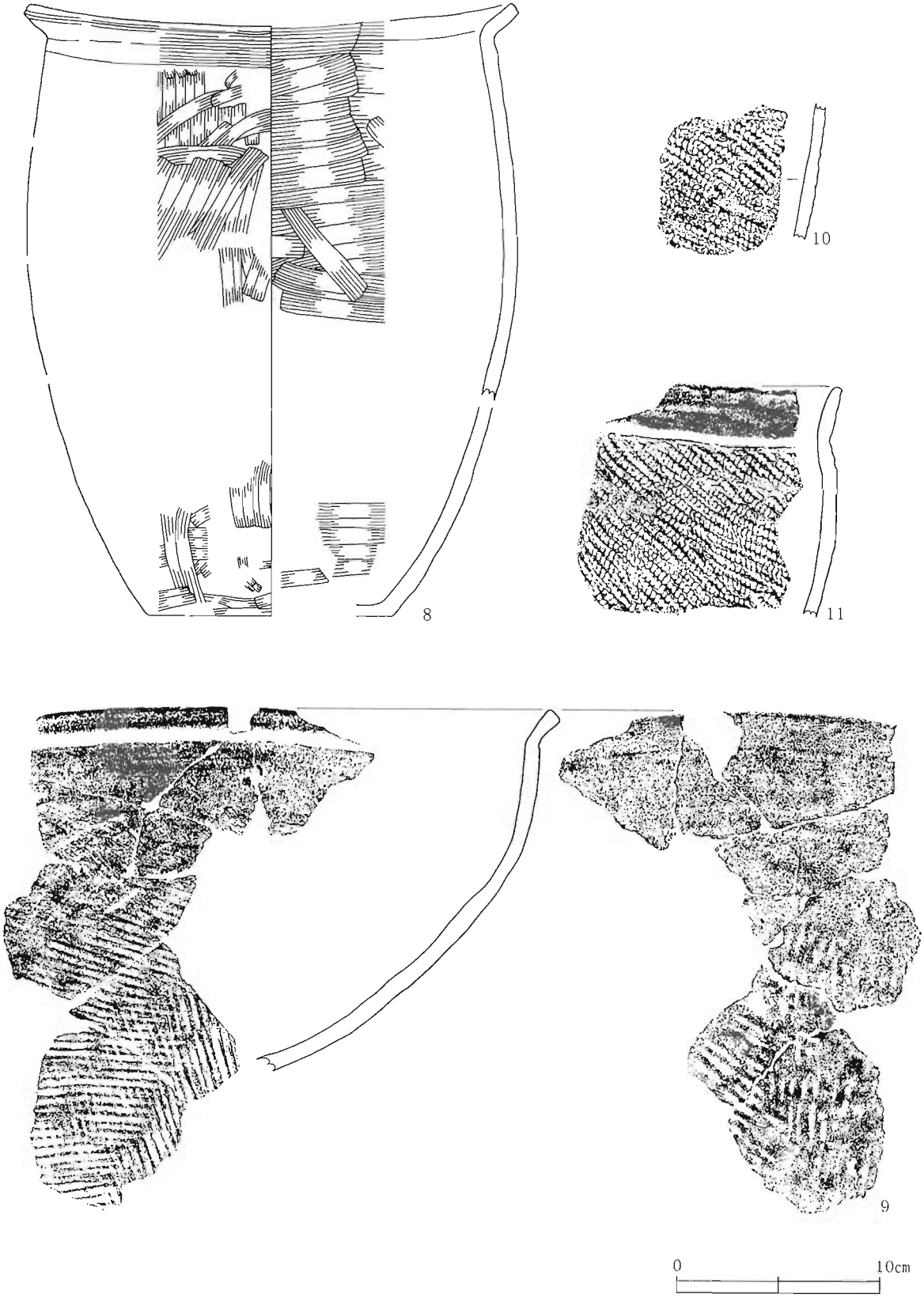
1．10YR2/3　黒褐色 粘性やや弱 しまりやや強 10YR4/3にぶい黄褐色土含む
2．10YR2/2　黒褐色 粘性やや弱 しまりやや強 焼土ブロックわずかに含む
3．10YR2/1　黒色土 粘性やや強 しまりやや弱
4．10YR2/1～2/2　黒～黒褐色土 粘性やや強 しまりやや弱　10YR4/4 褐色土含む
5．10YR2/2～2/3　黒褐色土 粘性強 しまりやや弱 2層と同じにぶい黄褐色土含む
6．10YR2/2　黒褐色土 粘性強 しまりやや弱 焼土ブロック(直径3cm程)含む



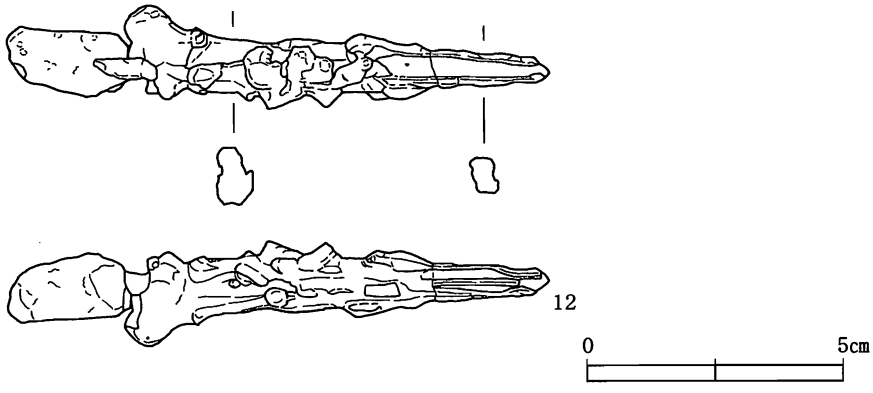
第8図　1号竪穴住居跡(2)



第９図　１号竪穴住居跡出土遺物(1)



第10図　1号竪穴住居跡出土遺物(2)



第11図　1号竪穴住居跡出土遺物(3)

＜時期＞　平安時代と思われる。

（2）2号竪穴住居跡（第12～14図、写真図版3・4・8・9図）

＜位置・検出状況＞　ⅡA4dグリットに位置する。耕作土を除去したⅢ層下面からⅣ層上面で検出した。住居の北側1.3m付近にある柱穴状ピットを煙り出し穴と捉え、精査に入った。

＜平面形・規模＞　規模は長軸2.91m、短軸2.88mで、平面形は隅丸方形を呈している。

＜埋土＞　17層に細分され、上部はややグライ化し、下部は黒色シルトを主体とし、ほぼレンズ状の自然堆積を示している。

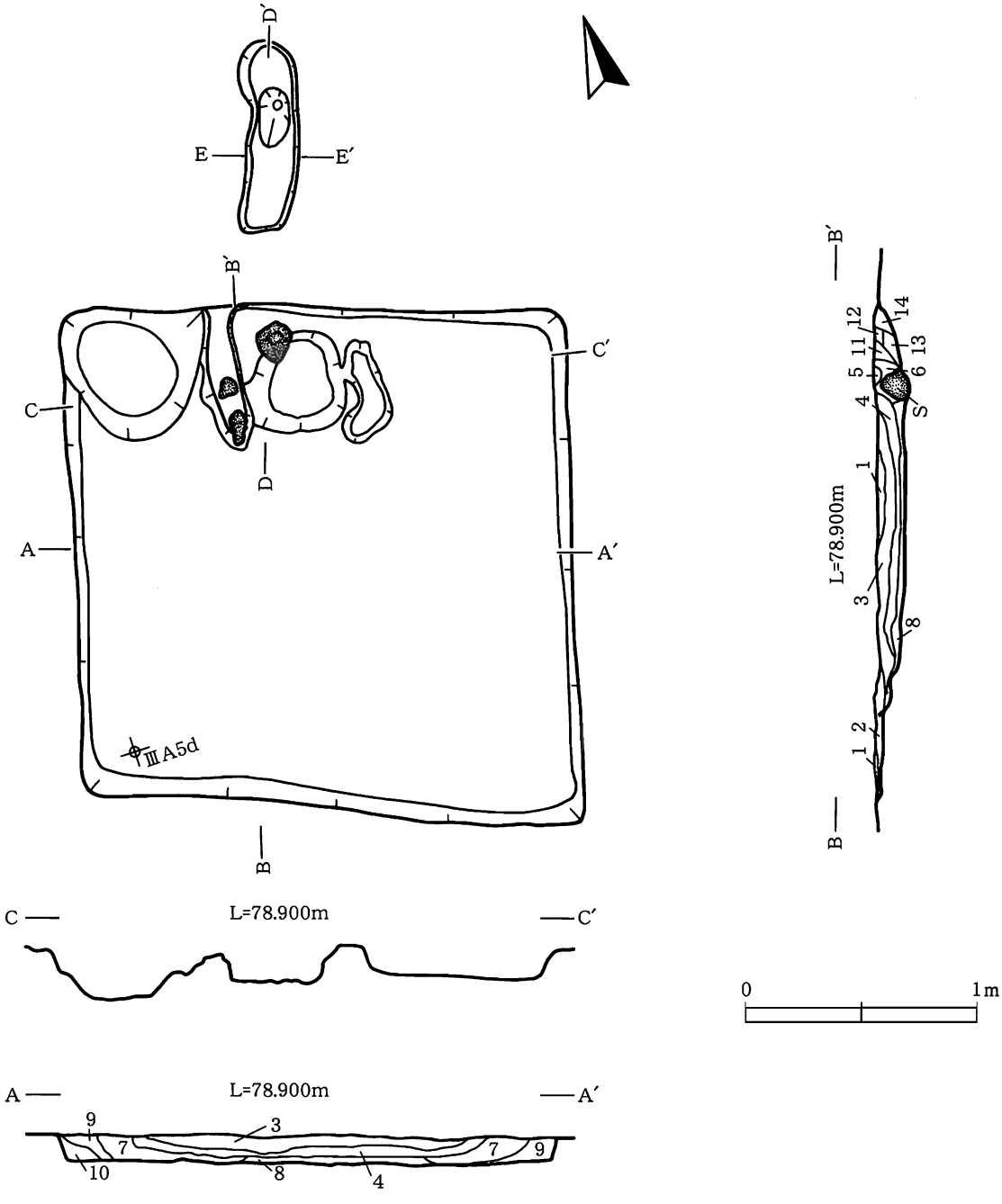
＜壁・床＞　壁高は東壁と西壁と北壁が15cm、南壁18cmを測る。

床面はほぼ平坦で、カマドが存在する北壁の一部を除き床面には幅40～50cm、深さ10～20cmのコの字状の貼り床が施してある。貼り床は、暗褐色シルトと黒色粘質土の混合土で床面中央には確認されない。

＜土坑＞　規模は開口部で長軸90cm、短軸70cm、深さ約30cmである。平面形は円形に近い楕円形を呈している。カマドの西脇に位置し、北西側の壁から掘り下げられていた。土師器の甕がほぼ完形の状態で出土している。

＜カマド＞　カマドは住居の北壁のやや西寄りに位置する。袖部は地山を削り出して構築されている。右袖部は燃焼部を囲むように屈曲している。燃焼部は径60cmの規模で中央が約10cm掘り下げられている。西側のカマドの袖部上方から礫が2点検出されており、芯材として利用されていたと思われる。煙道部は削平のため全様は把握できず、住居の北壁から40cmのところに北側へ1.10m延びる煙道を確認しただけである。煙道先端部には煙出し穴と思われる半楕円形を呈した部分を確認した。最深部は、煙道にあり深さは22cmである。

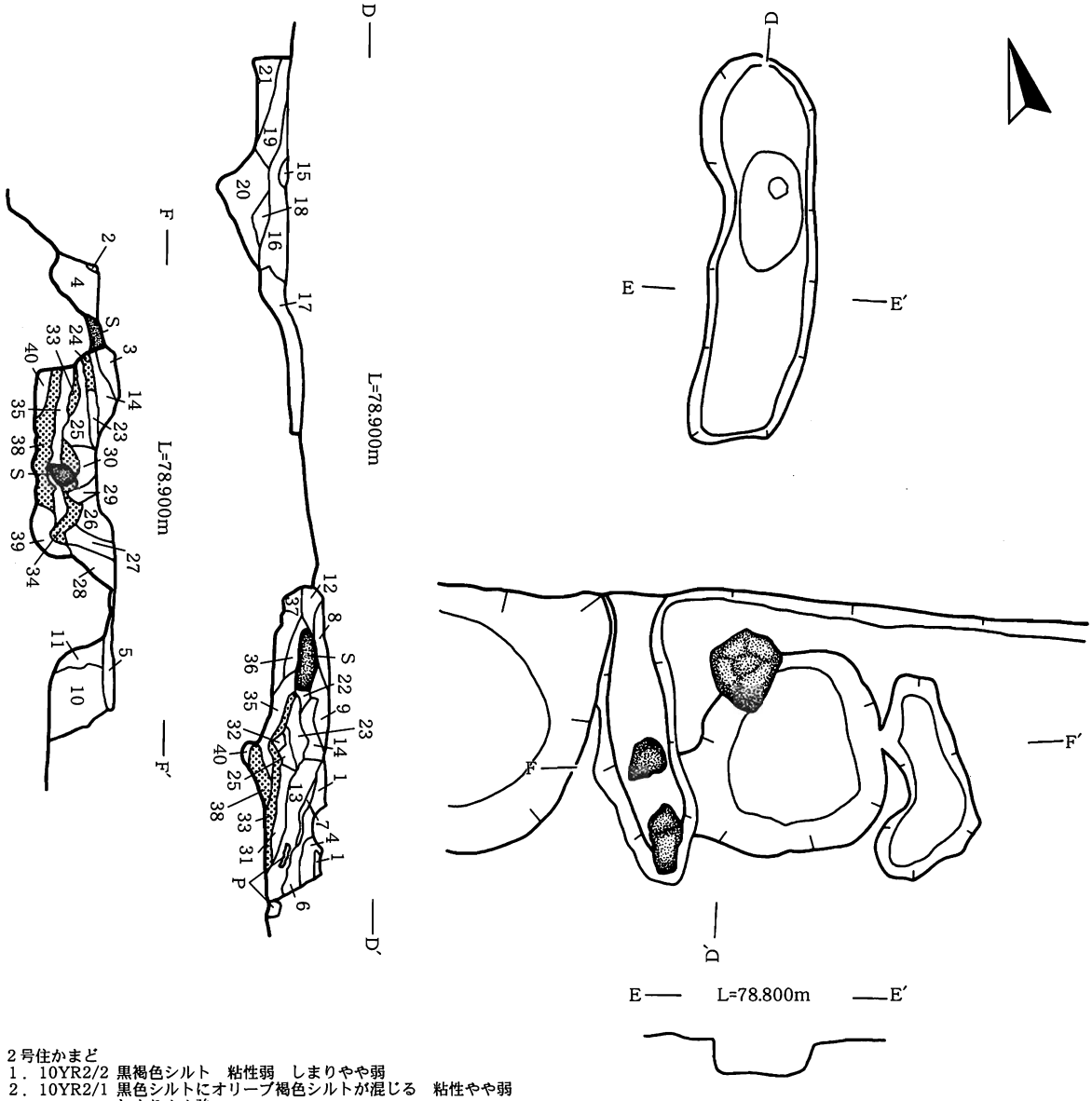
＜出土遺物＞　土坑、埋土中及びカマド崩落土中から土師器の坏（16）、甕（17～20）、多量の土師器片、数点の縄文土器片が、床面からは礫が出土している。坏はロクロ使用の土師器で、体部は底部より内湾し立ち上がる。17・18は土師器のロクロ未使用の小型の甕である。17は胴部がゆるやかに内湾し、胴部上部に最大径を持つ。頸部にはわずかな段を持ち、口縁部は内湾し底部には木葉痕が見られる。内面には口縁部から体部上部の一部にかけてススの付着が観察されている。18の頸部は直に立ち上がり、口縁部は外反し、器体の最大径は口縁部にある。内面、外面共にわずかながらススの付着が見られる。19の長胴甕は、底部に木葉痕が見られ、胴部内面に横位、外面に縦位のハケメ、口縁部にはそれぞれヨコナデによる調整が施されて



2号住

1．10YR2/2 黒褐色シルト　粘性弱　しまりやや弱
2．10YR4/4 褐色シルトと10YR2/2黒褐色シルトの混合土　粘性弱　しまりかなり強　下層に焼土含む
3．2.5Y4/6　オリーブ褐色シルト　粘性やや弱　しまりやや弱　軽いグライ化　酸化鉄シミ状に含む
4．2.5Y5/3　黄褐色シルト　粘性やや弱　しまりやや弱　軽いグライ化　酸化鉄をブロック状及びシミ状に３％含む
5．2.5Y4/6　オリーブ褐色シルト　粘性弱　しまりやや弱
6．10YR3/2 黒褐色シルト　しまりやや弱　粘性弱　木炭及び礫を含む
7．10YR2/1～2/2 黒色から黒褐色シルト　粘性やや弱　しまりやや弱　２層をブロック状に含む
8．10YR3/4 暗褐色シルト　しまりやや弱　粘性やや弱　10YR3/3暗褐色土含む
9．10YR1.7/1 黒色粘質シルト　しまり強　粘性やや強　中央に焼土の小ブロック含む
10. 10YR1.7/1 黒色粘質土　粘性強　しまりやや弱
11. 10YR2/1 黒色シルト　しまり強　粘性弱　焼土ブロック含む
12. 10YR2/2 黒褐色シルト　粘性弱　しまりやや弱
13. 10YR2/1 黒色シルト　粘性弱　しまりやや弱
14. 10YR2/2～2/3 黒褐色土シルト　粘性弱　しまりやや弱　褐色土含む

第12図　２号竪穴住居跡(1)

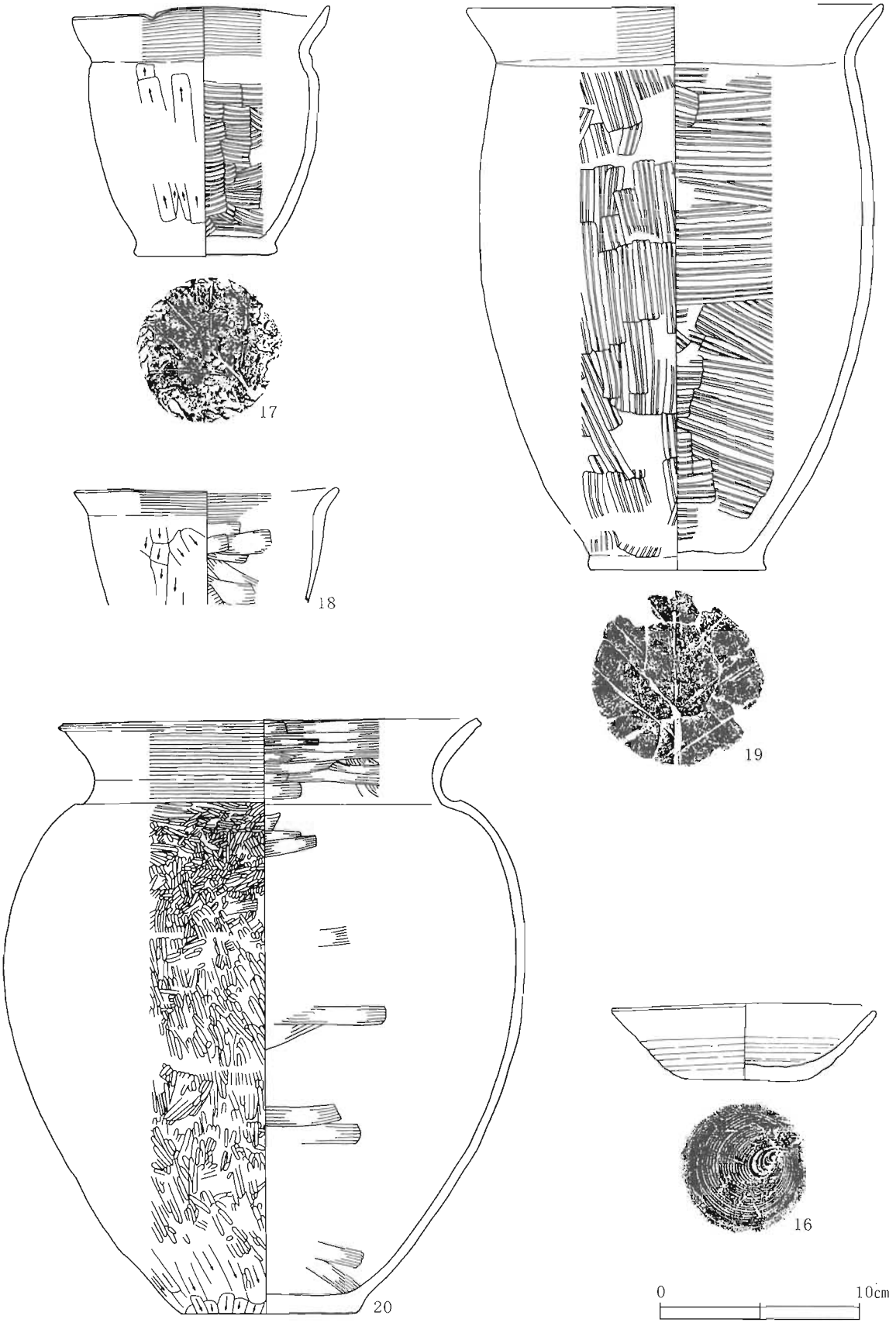


2号住かまど
1．10YR2/2 黒褐色シルト　粘性弱　しまりやや弱
2．10YR2/1 黒色シルトにオリーブ褐色シルトが混じる　粘性やや弱　しまりやや強
3．10YR4/4 褐色シルトと10YR2/2黒褐色シルトの混合土　粘性弱　しまり強　焼土ブロック含む
4．2.5Y4/6 オリーブ褐色シルト　粘性やや弱　しまりやや弱　軽いグライ化　酸化鉄をシミ状に含む
5．10YR4/1 褐灰色シルト　粘性やや弱　しまり強
6．2.5Y5/3 黄褐色シルト　粘性やや弱　しまりやや弱　軽いグライ酸化鉄をブロック状及びシミ状に３％含む
7．2.5Y4/3 オリーブ褐色　粘性やや弱　黒褐色土含む
8．10YR3/2 黒褐色粘質シルト　粘性やや強　しまり強　にぶい黄褐色土含む
9．10YR4/3 にぶい黄褐色シルト　粘性やや強　しまり強　黒褐色土含む
10．10YR2/1 黒色シルト　粘性やや強　しまり強
11．10YR3/3 暗褐色粘質シルト　粘性やや強　しまり強　褐色土ブロック含む
12．5YR5/6 明赤褐色シルト　粘性やや弱　しまりやや弱　黒褐色土含む
13．10YR3/4 暗褐色粘質土　粘性強　しまりやや弱　10YR3/3暗褐色土含む
14．10YR2/2 黒褐色シルト　粘性やや弱　しまりやや強　焼土微量に含む
15．10YR3/1～2/1 黒褐色から黒色シルト　粘性やや弱　しまりやや弱
16．10YR3/4 暗褐色シルト　粘性弱　しまり強　焼土わずかに含む
17．7.5YR3/4 暗褐色シルト　粘性やや弱　しまりやや弱　焼土、木炭わずかに含む
18．10YR3/3 暗褐色シルト　粘性弱　しまりやや弱　焼土ブロックわずかに含む
19．10YR3/1 黒褐色粘質土　粘性強　しまりやや弱　5YR4/6赤褐色土を含む
20．10YR2/1 黒色粘質土　粘性強　しまり弱　10YR2/2黒褐色シルトブロック含む

0　50cm

21．10YR2/1 黒色シルト　粘性やや弱　しまりやや弱
22．10YR3/4 暗褐色シルト　粘性やや弱　しまり強
23．10YR3/1 黒褐色シルト　粘性なし　しまりやや弱　焼土ブロック40％含む
24．2.5YR4/6 赤褐色焼土　粘性弱　しまりやや強
25．7.5YR3/4 暗褐色シルト　粘性なし　しまりやや弱　焼土わずかに含む
26．10YR4/3 にぶい黄褐色シルト　粘性弱　しまりやや弱
27．7.5YR2/3 極暗褐色粘質シルト　粘性やや強　しまりやや強　焼土ブロック含む
28．5YR3/6 暗赤褐色粘質土　粘性強　しまりやや強　焼土多量に含む
29．10YR2/2 黒褐色シルト　粘性弱　しまりやや弱　焼土わずかに含む
30．10YR4/3～3/3 にぶい黄褐色から暗褐色シルト　粘性弱　しまりやや弱
31．10YR4/2 灰黄褐色シルト　粘性なし　しまりやや弱
32．10YR5/4 にぶい黄褐色シルト　粘性弱　しまりやや弱
33．2.5YR5/8 明赤褐色焼土　粘性弱　しまりやや強
34．2.5YR4/6～4/8 赤褐色焼土　粘性なし　しまりやや強
35．5YR3/4 明赤褐色土　粘性強　しまり弱　焼土含む
36．10YR3/4 暗褐色シルト　粘性やや弱　しまりやや弱　焼土わずかに含む
37．10YR3/4 暗褐色シルト　粘性やや弱　しまりやや弱
38．2.5YR4/6 赤褐色焼土　粘性弱　しまり弱
39．7.5YR3/2 黒褐色粘質土　粘性強　しまりやや強　焼土ブロック含む
40．10YR4/3 にぶい黄褐色シルト　粘性なし　しまりやや弱

第13図　２号竪穴住居跡(2)



第14図　2号竪穴住居跡出土遺物

いる。また、内面に炭化物、外面にススの付着が見られる。最大径は口縁部にある。20は球胴気味の甕である。胴部は底部よりわずかに外反して立ち上がりその後内湾する。胴部中央に最大径を持ち、頸部に明瞭な段を持つ。口縁部は外反し口唇部へ続き、口唇部中央に窪みを持つ。

＜時期＞　出土した遺物から奈良時代と思われる。

（3）３号竪穴住居跡（第15～17図、写真図版５・９・10図）

＜位置・検出状況＞　ⅢＢ１ｂグリットに位置し、Ⅳ層上面で検出した。

＜平面形・規模＞　規模は長軸3.03m、短軸2.75mで、平面形は隅丸方形を呈している。

＜埋土＞　黒色及び黒褐色シルトを主体とする21層に細分される。堆積はレンズ状の自然堆積を呈している。７層は十和田ａ降下火山灰層である。火山灰層は住居南東側から南西側中程まで広がっており、南東側で最も多く堆積している。また、焼土と炭化材を含む埋土も多く、焼失住居の様相も考えられたが、炭化材は確認できなかった。焼土は床面で検出した北西側と南西側のみ図面に載せている。

＜壁・床＞　壁高は各壁とも約20cmである。床面はほぼ平坦で、貼り床は確認されていない。北西側、南西側に焼土、炭化材の広がりが見られる。

＜土坑＞　規模は開口部長軸71cm、短軸60cm、深さ25cmの円形に近い楕円形を呈している。埋土は黒褐色を主体とする３層に大別される。

柱穴No.	Ｐ１	Ｐ２
開口部(cm)	40×36	41×39
深　さ(cm)	4	4

また、床面精査中に黒色の広がりとして柱穴状のピットを２基（Ｐ１、Ｐ２）床面中央やや南寄りに検出した。埋土はともに１層のみで用途については不明である。

＜カマド＞　カマドは住居の東壁のほぼ中央に設置されている。左袖部は長さ63cm、幅25cm、右袖部が長さ93cm、幅15cmを測る。左袖部の壁際付近から礫が出土している。両袖とも褐色土に黒褐色土を混ぜたシルト混合土で構築されている。燃焼部は径45×35cmで、層厚５～７cm程の焼土が形成されている。煙道部は長さ95cm、検出面での幅は25cmである。燃焼部からなだらかに傾斜し、底面は平坦である。煙り出し部は35cm×26cm、深さ34cmの楕円形の土坑が掘り込まれている。

＜出土遺物＞　土坑及び埋土中から土師器の坏（21～30）が出土している。いずれも切り離しは回転糸切り技法である。21～29には内面に黒色処理が施されている。外形は底部から内湾し立ち上がるもの（21・25～27）、やや外反して立ち上がりその後内湾するもの（22～24）、口縁部が外反するもの（24・25・27）、外傾するもの（21）、体部より口縁部までそのまま内湾しているもの（22・23・26）がある。30はロクロ痕以外の調整を持たず、他の坏より器高が高い。22と23には『小田』が刻書されている。

＜時期＞　出土遺物から平安時代と思われる。

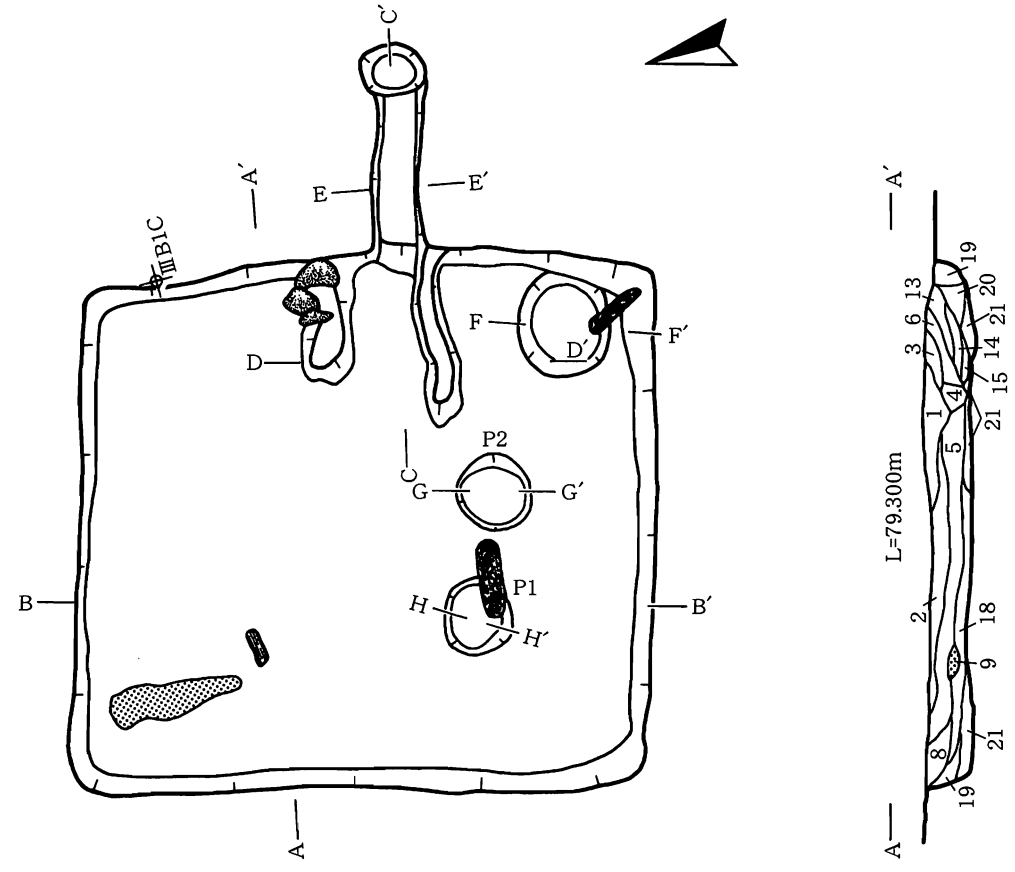
（4）４号竪穴住居跡（第18～22図、写真図版６・10図）

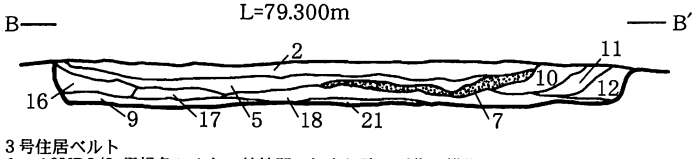
＜位置・検出状況＞　ⅢＢ１ｂグリットに位置し、黒色に広がる方形プランとして検出した。

＜平面形・規模＞　規模は長軸5.86m、短軸5.11mの不整長方形を呈する。

＜埋土＞　削平のため埋土は薄く、最も厚いところで６cm程度である。南北の土層を２層、東西の土層を１層に分けている。

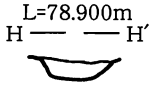
＜壁・床＞　削平により壁の残存状況は悪く、壁高は約3～５cmである。床面はほぼ平坦で、堅くしまって



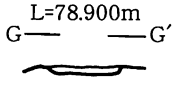


3号住居ベルト

1．10YR2/2 黒褐色シルト　粘性弱　しまり強　現代の耕作土
2．7.5YR2/2 黒褐色シルト　粘性弱　しまりやや弱　北側中央部に黄褐色シルト２％含む
3．10YR3/2 黒褐色シルト　粘性やや弱並　しまりやや強
4．10YR2/1 黒色シルト　粘性弱　しまり弱
5．7.5YR2/1 黒色シルト　粘性やや弱　しまりやや弱　炭化物混じる
6．7.5YR2/1 黒色シルト　粘性やや弱　しまりやや弱　火山灰ブロックわずかに含む
7．7.5YR5/3 にぶい褐色火山灰と7.5YR3/1黒褐色シルトの混合土　粘性弱　しまりやや弱　北側70％、南側30％火山灰　黒褐色土中に炭化物含む
8．10YR2/2 黒褐色シルト　粘性やや弱　しまりやや弱　褐色シルトブロック20％含む
9．5YR3/2　暗赤褐色シルト　粘性強、しまり弱　5YR4/8焼土及び炭化物25％含む
10. 7.5YR3/2 黒褐色シルト　粘性やや弱　しまりやや弱
11. 7.5YR2/1 黒色シルト　粘性やや弱　しまり弱　黄褐色ブロック含む
12. 7.5YR2/1 黒色シルト　粘性やや弱　しまりやや弱　焼土及び炭化物ブロック含む
13. 7.5YR2/1 黒色シルト　粘性やや弱　しまり弱　うすく褐色シルト含む
14. 10YR2/1 黒色シルト　粘性やや強　しまりやや弱　褐色シルトブロック10～15％含む
15. 10YR3/4 暗褐色シルト　粘性やや弱　しまり強　褐色土、焼土が混じる
17. 10YR1.7/1 黒色粘質土　粘性強　しまりやや弱
16. 10YR1.7/1 黒色シルト　粘性やや弱　しまり弱　焼土わずかに含む
18. 7.5YR2/2 黒褐色シルト　粘性やや弱　しまりやや弱　炭化物含む
19. 10YR2/1 黒色シルト　粘性弱　しまりやや弱
20. 10YR1.7/1 黒色シルト　粘性やや強　しまりやや弱
21. 10YR3/4 暗褐色シルト　粘性弱　しまり強　黒褐色シルト２～３％含む



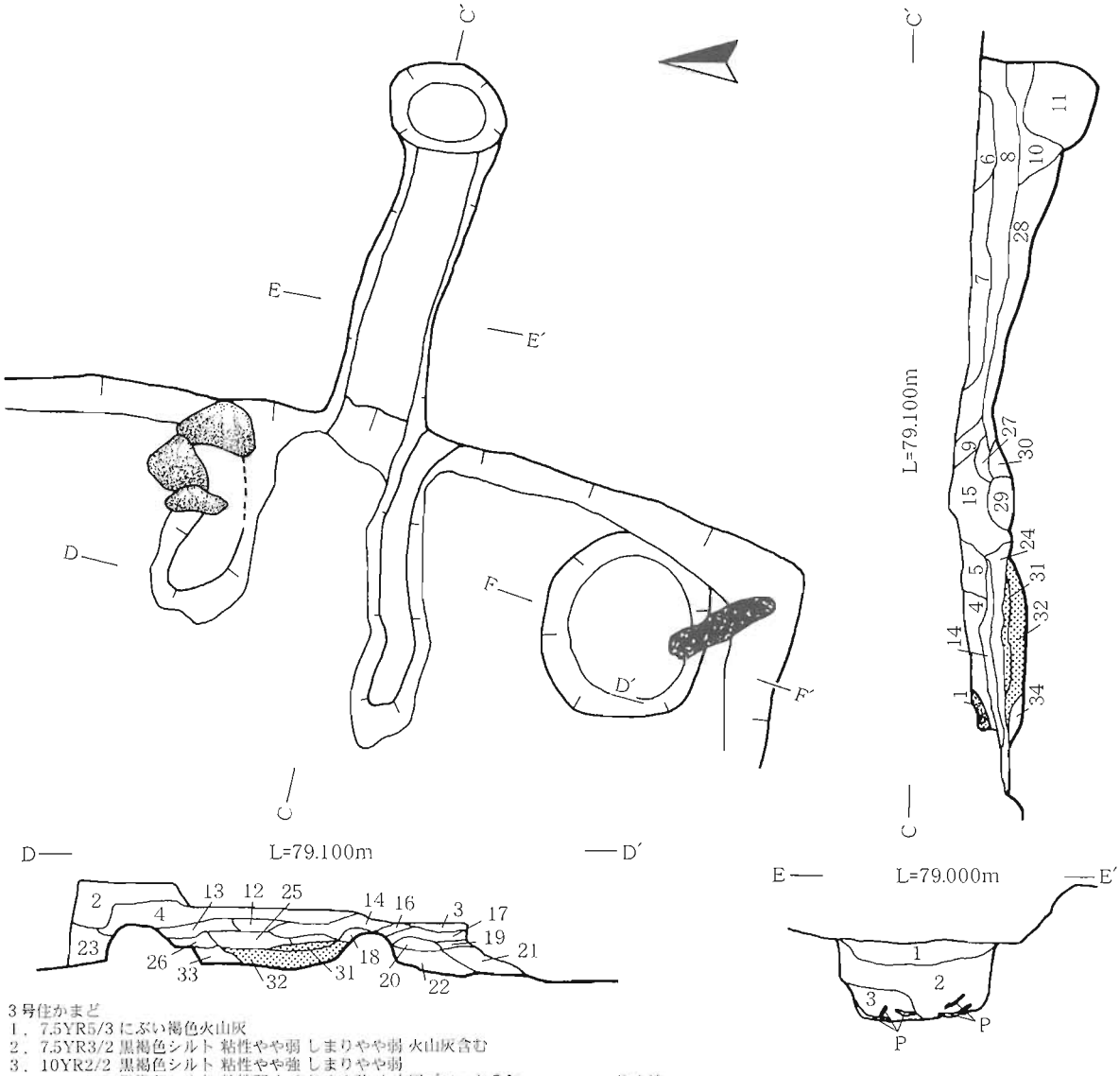
p 1
10YR1.7/1　黒色シルト 粘性やや弱 しまりやや弱 上部焼土含む



p 2
10YR1.7/1　黒色シルト 粘性やや弱 しまりやや弱 上部焼土混じる（p 1と同じ）

0　1m

第15図　３号竪穴住居跡(1)

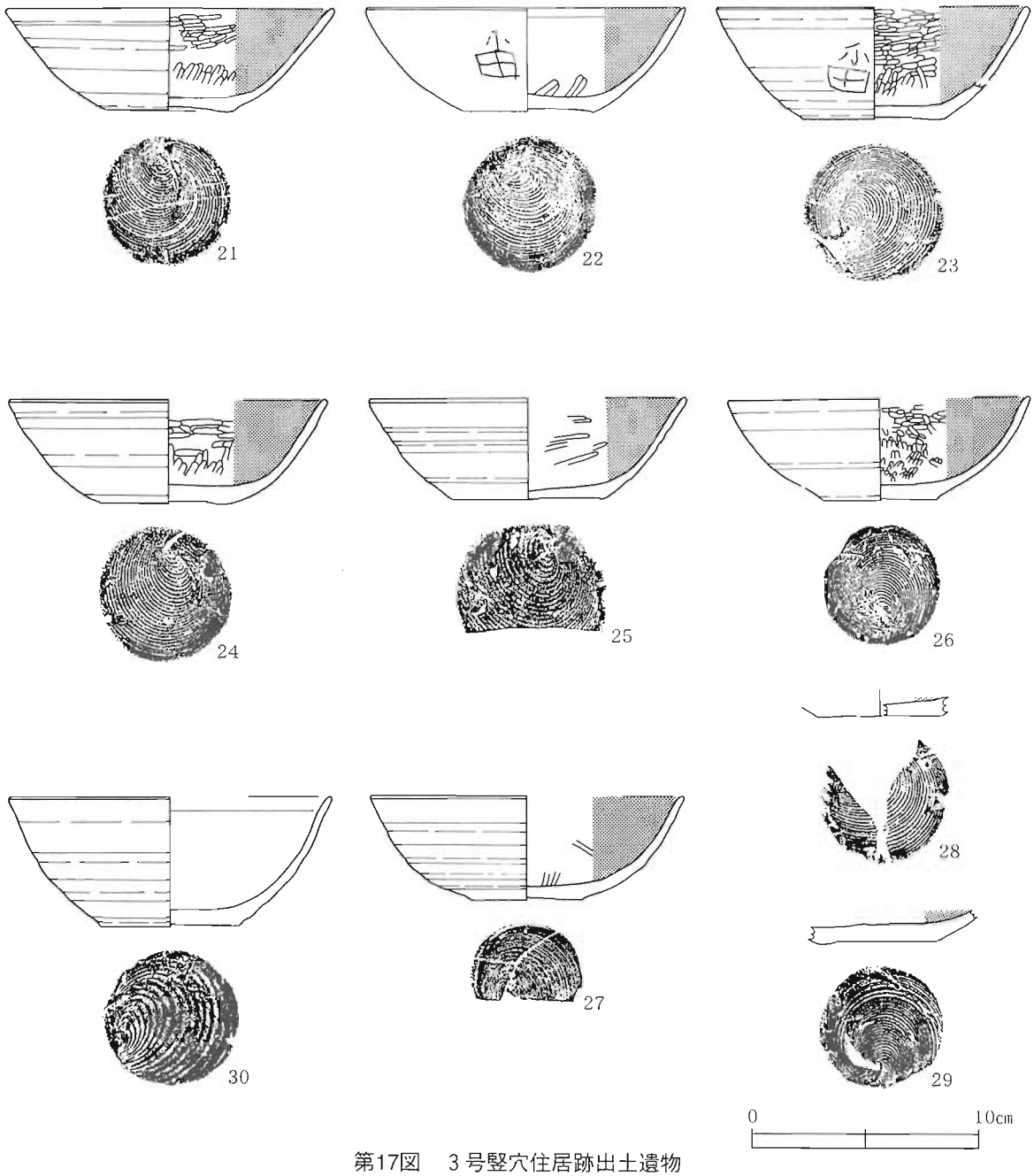


3号住かまど
1．7.5YR5/3 にぶい褐色火山灰
2．7.5YR3/2 黒褐色シルト 粘性やや弱 しまりやや弱 火山灰含む
3．10YR2/2 黒褐色シルト 粘性やや強 しまりやや弱
4．10YR2/3 黒褐色シルト 粘性弱 しまりやや強 火山灰ブロック５％含む
5．7.5YR3/2 黒褐色シルト 粘性やや弱 しまりやや強
6．10YR3/3～3/2 黒褐色シルト 粘性やや弱 しまりやや強 焼土及び褐色土を含む
7．10YR2/1 黒色シルト 粘性やや強 しまりやや弱
8．10YR1.7/1 黒色シルト 粘性やや強 しまりやや弱 焼土わずかに含む
9．10YR3/1 黒褐色シルト 粘性弱 しまり強 にぶい黄褐色土わずかに含む
10．10YR2/1 黒色シルト 粘性やや強 しまりやや弱 褐色土ブロック含む
11．10YR3/1 黒褐色シルト 粘性やや強 しまりやや弱
12．10YR2/3 黒褐色シルト 粘性やや強 しまりやや弱 焼土わずかに含む
13．10YR3/2 黒褐色シルト 粘性やや強 しまりやや弱 焼土、木炭含む
14．10YR2/3 黒褐色シルト 粘性やや弱 しまりやや強 焼土わずかに含む
15．10YR3/1 黒褐色シルト 粘性やや強 しまり強 にぶい黄褐色土含む
16．10YR2/2 黒褐色シルト 粘性やや強 しまりやや弱 にぶい黄褐色土わずかに含む
17．10YR2/3 黒褐色シルト 粘性弱 しまりやや弱 焼土ブロック含む
18．10YR2/1 黒褐色シルト 粘性やや弱 しまりやや弱
19．10YR2/3 黒褐色シルト 粘性やや弱 しまりやや弱 焼土及び炭化物含む
20．10YR4/3 にぶい黄褐色シルト 粘性なし しまりやや弱
21．10YR3/4 暗褐色シルト 粘性やや弱 しまりやや弱
22．10YR3/4 暗褐色シルト 粘性やや弱 しまりやや弱 粘性強の黒褐色土まばらに混じる
23．10YR2/3 黒褐色シルトと10YR3/4暗褐色シルトの混合土 粘性やや強 しまりやや弱 下部焼土ブロック含む

3号住土坑
1．7.5YR3/1 黒褐色シルト 粘性やや強 しまりやや弱 10YR4/3にぶい黄褐色粘質シルト及び10YR4/1褐灰土含む
2．10YR1.7/1 黒色粘質シルト 粘性やや強 しまりやや弱
3．7.5YR3/1 黒褐色シルト 粘性やや強 しまりやや弱 焼土ブロック含む

24．7.5YR3/2 黒褐色シルト 粘性やや弱 しまりやや弱 焼土ブロック含む
25．10YR2/3 黒褐色シルト 粘性やや強 しまりやや弱 黄褐色土含む
26．10YR3/2 黒褐色シルト 粘性やや強 しまりやや弱 焼土及び炭化物わずかに含む
27．10YR2/1 黒色シルト 粘性やや弱 しまりやや弱 焼土わずかに含む
28．10YR2/2 黒褐色シルト 粘性やや強 しまりやや弱 焼土含む
29．10YR2/1 黒色シルト 粘性やや強 しまりやや弱
30．10YR3/1 黒褐色シルト 粘性やや強 しまり強
31．7.5YR4/6 褐色焼土 粘性やや弱 しまりやや強
32．5YR4/8 赤褐色焼土 粘性やや弱 しまりやや強
33．10YR4/4 褐色シルトと10YR2/2黒褐色シルトの混合土 粘性やや強 しまりやや弱
34．10YR2/3 黒褐色シルト 粘性やや弱 しまりやや強 暗褐色土ブロック７％含む

第16図　３号竪穴住居跡(2)

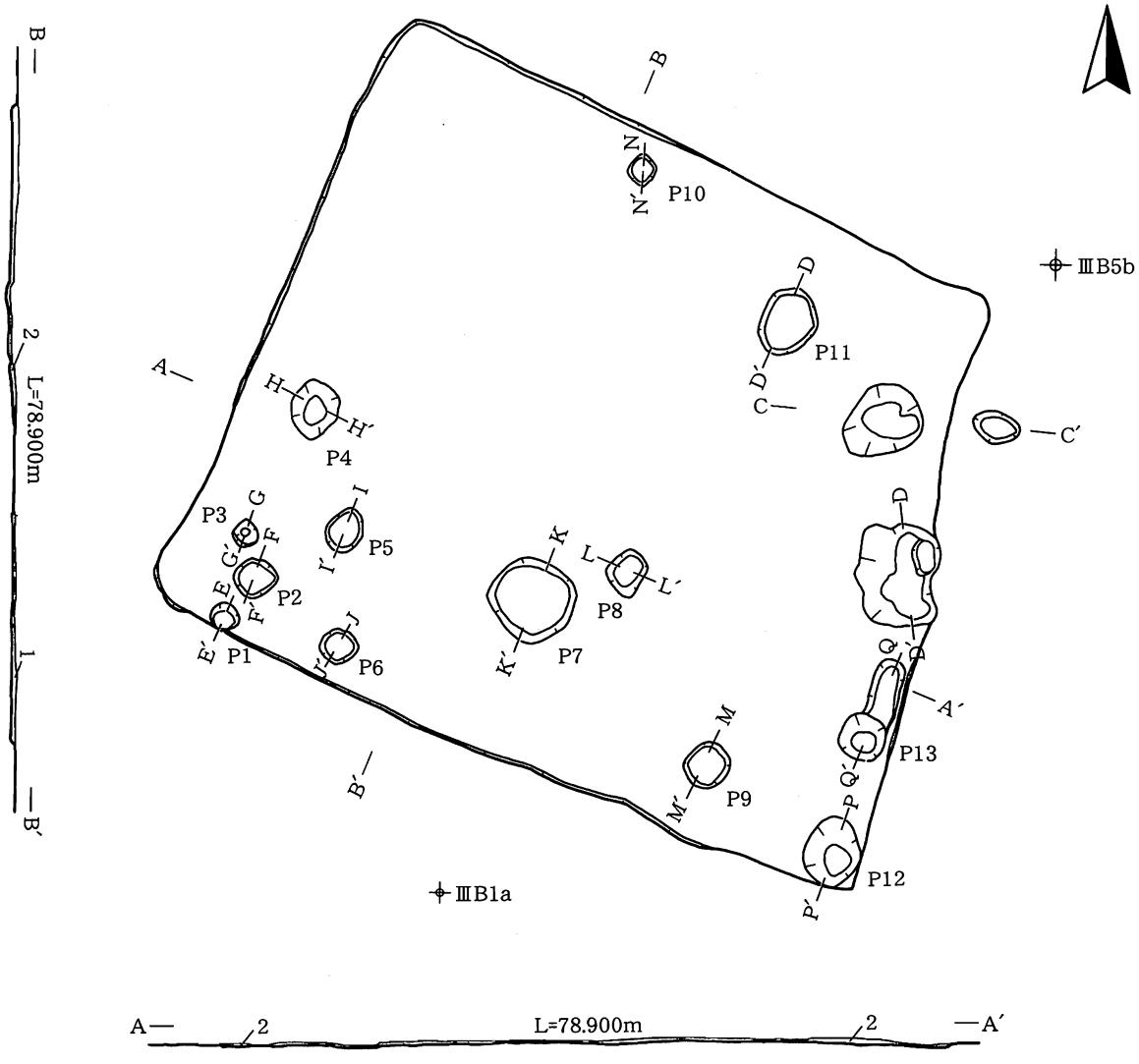


第17図　3号竪穴住居跡出土遺物

いる。北壁と西壁から住居の内側にかけて幅1m程の黒色土を混ぜた貼り床を確認している。貼り床内に地山が露出しているところもあり、壁と同様に削平されている。

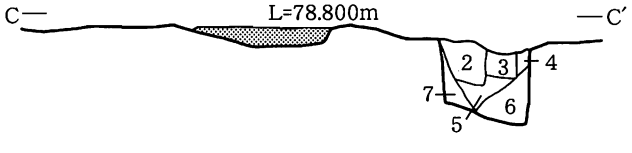
＜土坑・柱穴＞　床面精査中に付属施設と思われる土坑を1基、柱穴状土坑を13基検出した。土坑の規模は開口部長軸80cm、短軸60cm、深さ35cmの隅丸長方形を呈している。土坑及びP4、P12からはわずかに土器片が出土している。柱穴状土坑にはいずれも柱痕跡は確認されず用途、時期については不明である。

柱穴No.	P 1	P 2	P 3	P 4	P 5	P 6	P 7
開口部(cm)	25×21	37×31	22×20	50×37	37×29	28×28	67×65
深　さ(cm)	16	17	17	10	11	10	14



4号住居ベルト、住居内土坑及びピット
1．10YR2/2　黒褐色シルト　粘性やや弱　しまり強　10YR3/4暗褐色シルト～10YR4/4褐色シルト及び焼土含む
2．10YR2/2　黒褐色粘質シルト　粘性やや強　しまり強

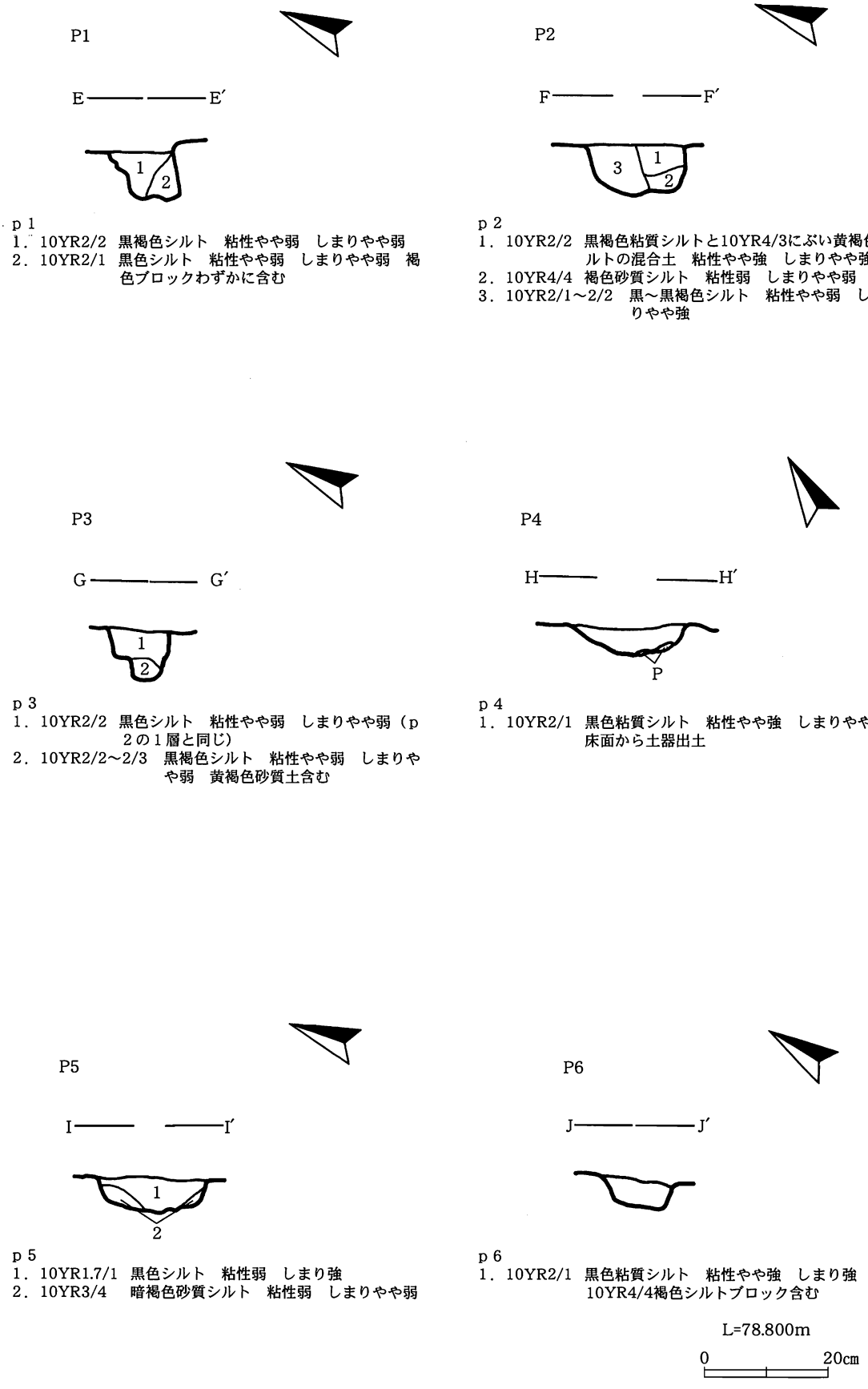
0　2m



4号住かまど
1．2.5YR4/6　赤褐色焼土　粘性やや弱　しまりやや弱
2．10YR3/4　暗褐色シルトと10YR2/2黒褐色シルトの混合土　粘性やや弱　しまり強　黄褐色砂質土わずかに含む
3．10YR2/1　黒褐色粘質土　粘性強　しまり弱
4．10YR2/1　黒褐色シルト　粘性やや強　しまりやや弱　黄褐色ブロックわずかに含む
5．10YR1.7/1 黒色粘質土　粘性かなり強　しまり弱
6．10YR1.7/1 黒色粘質土　粘性かなり強　しまりかなり弱
7．10YR3/4　暗褐色砂質シルト　粘性弱　しまりやや弱　黄褐色砂質土わずかに含む

0　1m

第18図　4号竪穴住居跡(1)



p 1
1．10YR2/2　黒褐色シルト　粘性やや弱　しまりやや弱
2．10YR2/1　黒色シルト　粘性やや弱　しまりやや弱　褐色ブロックわずかに含む

p 2
1．10YR2/2　黒褐色粘質シルトと10YR4/3にぶい黄褐色シルトの混合土　粘性やや強　しまりやや強
2．10YR4/4　褐色砂質シルト　粘性弱　しまりやや弱
3．10YR2/1～2/2　黒～黒褐色シルト　粘性やや弱　しまりやや強

p 3
1．10YR2/2　黒色シルト　粘性やや弱　しまりやや弱（p２の１層と同じ）
2．10YR2/2～2/3　黒褐色シルト　粘性やや弱　しまりやや弱　黄褐色砂質土含む

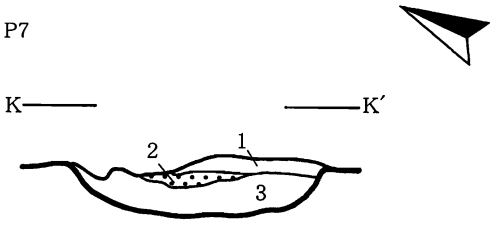
p 4
1．10YR2/1　黒色粘質シルト　粘性やや強　しまりやや弱
床面から土器出土

p 5
1．10YR1.7/1　黒色シルト　粘性弱　しまり強
2．10YR3/4　暗褐色砂質シルト　粘性弱　しまりやや弱

p 6
1．10YR2/1　黒色粘質シルト　粘性やや強　しまり強
10YR4/4褐色シルトブロック含む

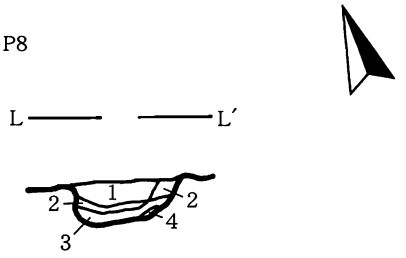
第19図　4号竪穴住居跡(2)

P7



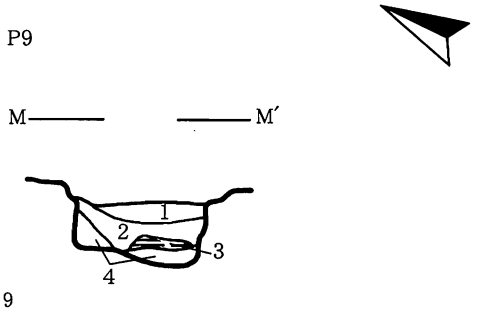
p 7
1．10YR2/2～2/3　黒褐色シルト　粘性やや弱　しまりやや弱　焼土ブロック含む
2．10YR2/2～2/3　黒褐色シルト　1層に2.5YR4/6赤褐色の焼土層が太く入る（焼土で分離）
3．10YR1.7/1　黒色粘質シルト　粘性やや強　しまりやや弱

P8



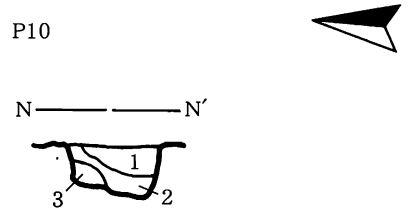
p 8
1．10YR2/2　黒褐色シルト　粘性やや弱　しまりやや弱　砂土わずかに含む
2．10YR4/4　褐色砂質シルト　粘性なし　しまり強
3．10YR2/1　黒色シルト　粘性やや弱　しまり強
4．10YR3/4　暗褐色砂質シルト　粘性なし　しまり強　2層と似ているが、粒子は粗い

P9



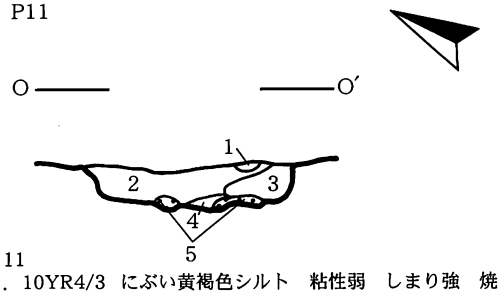
p 9
1．10YR3/1　黒褐色シルトに5YR4/4にぶい赤褐色の焼土が混じる　粘性強　しまりやや弱
2．10YR3/1　黒褐色シルト　粘性弱　しまりやや弱　砂土及び焼土を含む
3．7.5YR2/3　極暗褐色木炭層　しまり弱
4．10YR3/4　暗褐色シルト　粘性弱　しまりやや弱　砂土を含む

P10



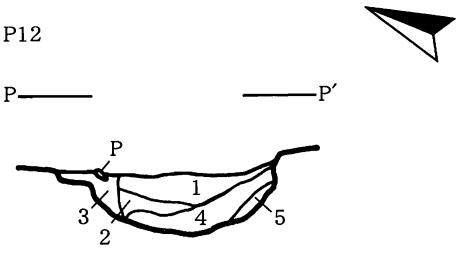
p 10
1．10YR2/2　黒褐色シルト　粘性やや弱　しまりやや弱
2．10YR3/4　暗褐色シルト　粘性やや弱　しまりやや弱
3．10YR3/4　暗褐色砂質シルト　粘性弱　しまりやや弱　2層より黒い

P11



p 11
1．10YR4/3　にぶい黄褐色シルト　粘性弱　しまり強　焼土ブロック含む
2．10YR2/2　黒褐色粘質土　粘性強　しまり強　にぶい黄褐色ブロック多量に含む
3．10YR3/2　黒褐色シルト　粘性やや強．しまりやや強　焼土ブロック及び黄褐色土含む
4．10YR3/3　暗褐色シルト　粘性やや強　しまりやや弱
5．5YR3/6　暗赤褐色焼土　粘性やや弱　しまりやや弱

P12

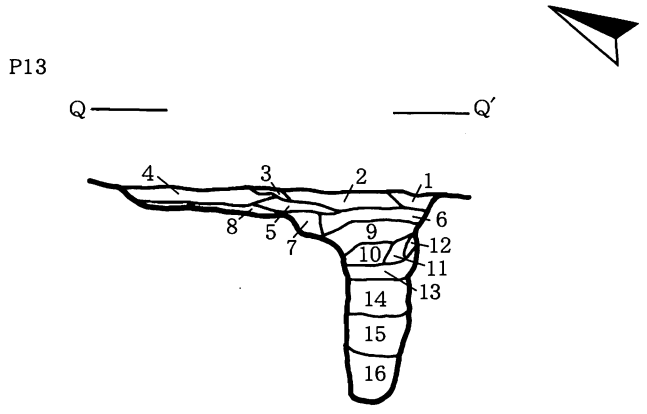


p 12
1．10YR1.7/1　黒色シルト　粘性やや弱　しまりやや弱
2．10YR3/1　黒褐色粘質土　粘性強　しまりやや弱　上部より土器片出土
3．10YR2/2　黒褐色シルト　粘性弱　しまりやや弱　10YR4/4褐色シルトブロック含む
4．10YR2/2　黒褐色シルト　粘性やや強　しまり強
5．10YR4/4　褐色砂質シルト　粘性弱　しまりやや弱

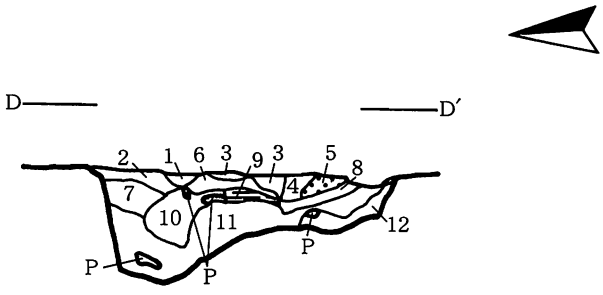
L=78.800m

0　20cm

第20図　4号竪穴住居跡(3)



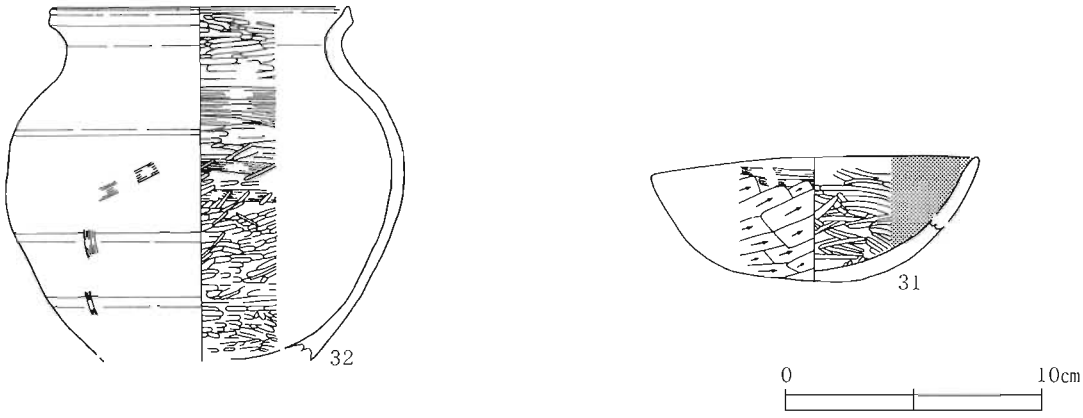
p13
1．10YR3/3 暗褐色シルト　粘性弱　しまりやや弱　焼土わずかに含む
2．10YR2/3 黒褐色シルト　粘性やや弱　しまりやや弱　10YR4/6褐色土含む
3．10YR4/3 にぶい黄褐色シルト　粘性やや弱　しまりやや弱
4．10YR3/4 暗褐色シルトと10YR2/3　黒褐色シルト（木炭わずかに含む）の混合土
粘性弱　しまりやや弱　北側黒褐色土多い
5．10YR4/6 褐色シルト　粘性やや弱　しまりやや弱　焼土ブロック含む
6．10YR3/4 暗褐色砂質シルト　粘性弱　しまりやや弱
7．10YR3/3 暗褐色粘質砂質シルト　粘性強　しまりやや弱
8．10YR4/4 褐色シルト　粘性弱　しまりやや弱
9．10YR2/1 黒色シルトと10YR3/3暗褐色シルトの混合土　粘性やや弱　しまり弱
10. 10YR4/4 褐色シルトと10YR3/1黒褐色シルトの混合土　粘性弱　しまりやや弱
11. 10YR3/4 暗褐色砂質シルト　粘性なし　しまりやや弱
12. 10YR3/2 黒褐色シルトと2/1黒色シルトの混合土　粘性弱　しまりやや弱
13. 10YR3/4 暗褐色シルト　粘性やや弱　しまり強
14. 10YR3/3～3/4　暗褐色砂質土　粘性なし　しまりやや弱
15. 10YR3/4 暗褐色シルト　粘性やや弱　しまりやや弱　砂土を含む
16. 10YR3/3 暗褐色粘質土　粘性かなり強　しまりやや弱　砂土を含む



4号住土坑
1．10YR3/4 暗褐色シルト　粘性やや弱　しまりやや弱
2．10YR3/3 暗褐色シルト　粘性弱　しまりやや弱　砂土をわずかに含む
3．7.5YR3/3 暗褐色シルト　粘性やや弱　しまりやや弱　焼土ブロック（30%）及び木炭
をわずかに含む
4．10YR2/2 黒褐色シルト　粘性やや弱　しまりやや弱　焼土ブロック及び木炭を含む
5．5YR4/4　にぶい赤褐色焼土　粘性並　しまり強
6．10YR3/1 黒褐色シルト　粘性やや弱　しまりやや弱
7．10YR2/1 黒色粘質シルト　粘性やや強　しまり弱　2、10層の混合土
8．10YR3/2 黒褐色シルト　粘性やや弱　しまり強　炭と焼土を含む
9．10YR1.7/1　黒色木炭層
10. 10YR2/1 黒色粘質土　粘性強　しまり弱
11. 10YR3/4 暗褐色シルト　粘性弱　しまりやや弱
12. 10YR3/3 暗褐色粘質土　粘性強　しまりやや弱

L=78.800m
0　20cm

第21図　4号竪穴住居跡(4)



第22図　４号竪穴住居跡出土遺物

柱穴No.	Ｐ８	Ｐ９	Ｐ10	Ｐ11	Ｐ12	Ｐ13
開口部(cm)	34×29	37×34	23×21	56×45	59×47	85×38
深　さ(cm)	11	18	14	12	16	56

＜カマド＞　床面精査時に燃焼部と思われる焼土と住居外の約20cm離れた所に煙り出しと思われる土坑を検出した。かなり削平されており詳細が不明である。

＜出土遺物＞　31は土師器の坏である。ロクロ未使用で内面にはヘラミガキ後黒色処理を施している。胴部は底部より内湾し立ち上がり、底部は丸底気味の平底である。32はロクロ使用の土師器の壺である。器面はヘラミガキ調整である。胴部は底部からやや内湾して立ち上がり、胴部上部で強く内湾し頸部へ続いている。口縁部は頸部からくの字に外反し口唇部に至る。口唇部は中央にやや窪みを持つ。

＜時期＞　出土遺物から平安時代と思われる。

（５）陥し穴状遺構（第23図、写真図版６図）

＜位置・検出状況＞　調査区ⅢＡ４ｃ～５ｃに位置し、Ⅲ層下面で検出し２号竪穴住居跡の東側に隣接している。

＜平面形＞　平面形は溝状で、断面はＶ字状を呈している。規模は長軸3.0m、短軸40cm、深さ60cmである。

＜埋土＞　黒褐色土を主体とする８層に大別される。下部は粘性が強く、砂質の褐色土を含んでいる。

＜出土遺物＞　出土していない。

＜時期＞　時期判断の資料を欠き、詳細は不明であるが形状や類例から縄文時代のものと思われる。

（６）１号土坑（第23図、写真図版６図）

＜位置・検出状況＞　調査区ⅢＡ２ｄ付近に位置し、Ⅲ層下面で黒色土の円形プランを検出した。

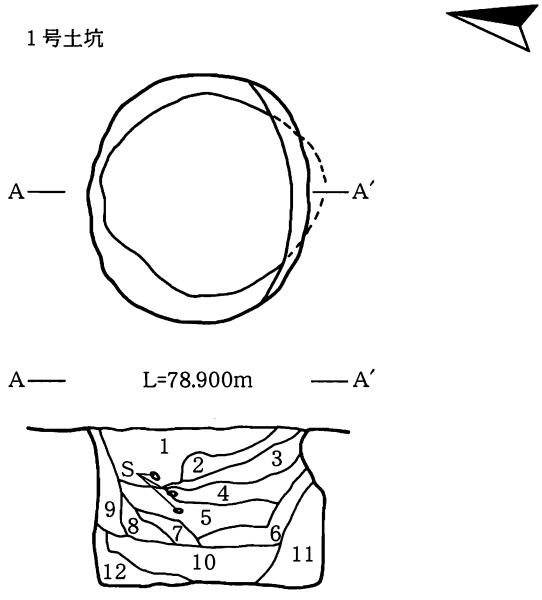
＜平面形・規模＞　開口部で長軸1.3m、短軸1.15m、深さ84cmの楕円形を呈している。南側では底面が上端より入り込んでいる。

＜埋土＞　黒褐色土を主体とし、礫を多く含んでいる。９層と11層は地山の崩落土である。

＜出土遺物＞　出土していない。

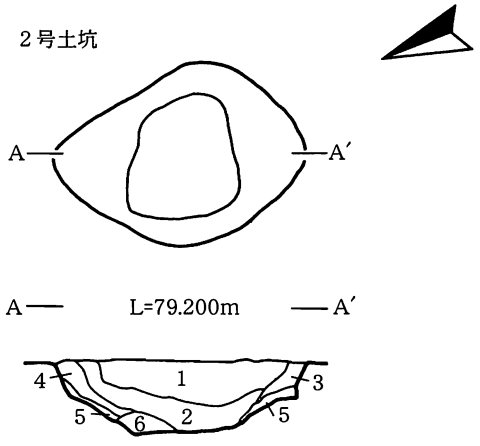
＜時期＞　不明である。

1号土坑



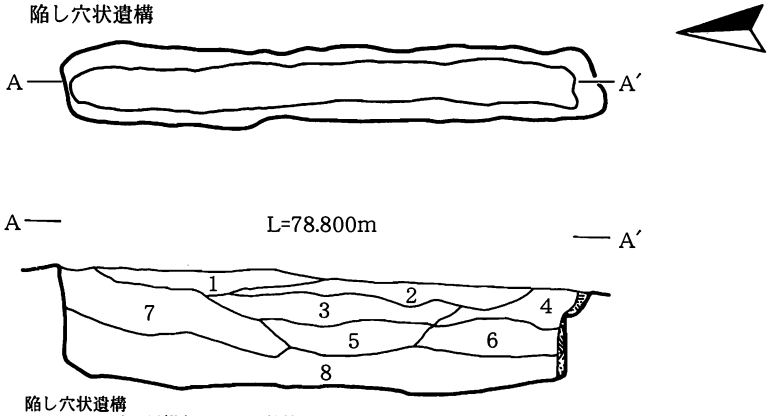
1号土坑
1．10YR3/2 黒褐色と5/6黄褐色砂質シルトの混合土　粘性やや弱　しまり強　礫（直径10～80㎜）含む
2．10YR5/6 黄褐色シルト　粘性やや強　しまり強　礫（直径10～50㎜）少量含む
3．10YR3/2 黒褐色シルト　粘性強　しまり強
4．10YR3/2 黒褐色シルト　粘性強　しまりやや強い　土器片、礫（直径10～30㎜）砂質ブロック（直径5㎝）微量含む
5．10YR3/2 黒褐色と5/6黄褐色砂質シルトの混合土　粘性やや強　しまりやや強　礫を多く含む
6．10YR4/4 褐色シルト　粘性やや強　しまり強
7．10YR4/4 褐色砂質シルト　粘性やや強　しまり強
8．10YR2/2 黒褐色粘土質シルト　粘性強　しまりやや強
9．10YR4/3 にぶい黄褐シルト　粘性やや強　しまり強　地山崩落土
10．10YR2/2 黒褐色粘土質シルト　粘性強　しまりやや強8層と同じであるが礫（直径10～30㎜）少量含む
11．10YR4/3 にぶい黄褐シルト　粘性やや強　しまり強　地山崩落土
12．10YR2/2 黒褐色と10YR4/3にぶい黄褐色粘土質シルト粘性強　しまり強　地山ブロックやや多く含む

2号土坑



2号土坑
1．10YR1.7/1　黒色粘質土　粘性強　しまり強　酸化鉄含む
2．10YR2/1～2/2 黒～黒褐色粘質シルト　粘性やや強　しまり強　酸化鉄含む
3．10YR3/1　黒褐色シルト　粘性弱　しまり強
4．10YR2/1～2/2 黒～黒褐色粘質シルト　粘性やや強　しまりやや弱　酸化鉄ブロック含む
5．10YR3/1～3/2 黒褐色シルト　粘性弱　しまりやや弱　砂土、酸化鉄ブロック含む
6．10YR2/2～2/3 黒褐色シルト　粘性やや弱　しまりやや弱　酸化鉄含む

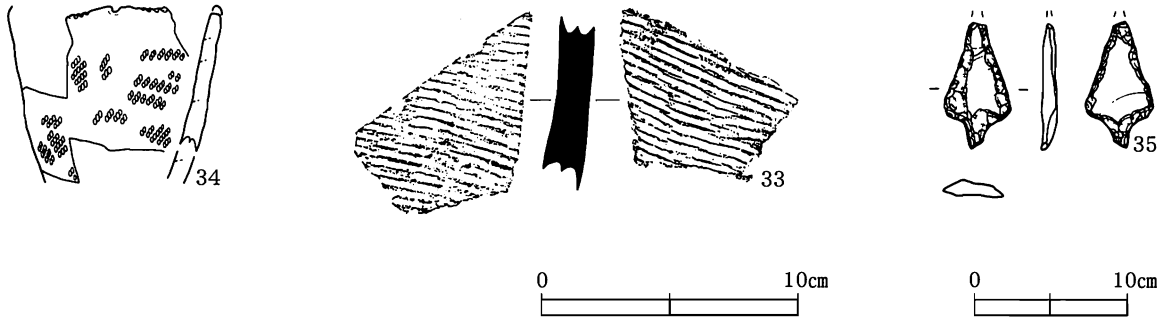
陥し穴状遺構



陥し穴状遺構
1．10YR3/1 黒褐色シルト　粘性弱　しまりやや強　現代の耕作土
2．10YR2/2 黒褐色シルト　粘性やや弱　しまり強
3．10YR2/1 黒色粘質土　粘性強　しまりやや弱
4．10YR2/3 黒褐色粘質土　粘性強　しまりやや強　10YR3/4暗褐色シルトブロック10％含む
5．10YR3/4 暗褐色粘質土　粘性強　しまりやや弱　10YR2/2黒褐色粘質土含む
6．10YR2/2 黒褐色粘質土　粘性強　しまり弱
7．10YR2/1 黒色シルト　粘性やや弱　しまり弱　10YR4/4褐色シルトブロック20％及び砂土を含む
8．10YR2/2 黒褐色粘質土　粘性かなり強　しまり弱　中央部より北側に10YR3/4暗褐色砂質土ブロック15％含む

0　1m

第23図　土坑・陥し穴状遺構



第24図　遺構外出土遺物

（7）２号土坑（第23図、写真図版６図）

＜位置・検出状況＞　調査区ＩＡ５ｅ付近に位置し、Ⅲ層上面で黒色の広がりを検出した。

＜平面形・規模＞　規模は開口部で長軸1.33m、短軸92cm、深さ37cmで平面形は楕円形を、断面は椀形を呈する。

＜埋土＞　６層に大層され、ほぼレンズ状の自然堆積の様相を呈している。酸化鉄ブロックをやや多く含む。

＜出土遺物＞　出土していない。

＜時期＞　不明である。

（8）遺構外出土遺物（第24図、写真図版10図）

遺構外出土遺物は、縄文土器と土師器片が大半を占める。須恵器片、未完成の石器も数点出土している。いずれも遺構検出時や遺構周辺からの出土である。破片で接合できるものがほとんどなかったため、土器については33～35の３点、石器については１点のみを掲載し、他は不掲載とした。33は調査区西側中央から出土した須恵器甕の破片、34は調査区南東隅から出土した縄文時代晩期の土器、35は調査区南西隅から出土した石鏃である。

V　まとめ

今回の調査で検出された遺構は、竪穴住居跡４棟、土坑２基、陥し穴状遺構１基である。主な出土遺物は、土師器、須恵器、石器、金属品、鉄滓、縄文土器である。縄文土器は約0.5箱、土師器は約1.5箱ほど出土している。検出された遺構の主体は奈良・平安時代である。

１．出土遺物

（１）縄文土器

遺構外及び住居内埋土中からの出土である。今回調査し、検出した住居の時期とは明らかに異なるものでである。陥し穴状遺構の使用時期と同時代のものかどうかは不明である。したがって、器形の分かるものと大きめの破片の３点のみを掲載し他は不掲載とした。いずれも土器の型式、文様から縄文時代晩期中葉以降（大洞Ｃ２からＡ式）のものであり、近隣に縄文時代晩期以降の遺跡が存在する可能性をうかがわせるものである。

（２）石器

25点出土しているが、完形品は掲載した石鏃１点である。ほどんどが剥片で、用途等詳細については不明である。遺物の石質は、主に頁岩（奥羽山系）である。

（３）須恵器

遺構外から甕の破片と思われるものが数点出土しているのみである。

（４）土師器

遺物は主に竪穴住居跡から出土している。器種は、坏、甕（小型甕、長胴甕、球胴甕）、鉢である。遺物の特徴を器種ごとにまとめると以下の通りである。

なお、出土遺物（坏・甕）の時期の推定には、古代城柵官衛遺跡検討会資料集「東北地方の古代集落第３分冊」北上盆地北部、北上盆地南部（1998年）を参考とした。

＜坏＞

・調整と器形による分類

Ⅰ群・・・・・・ロクロ不使用のもの

Ａ群・・・・・・内外面ともミガキ、黒色処理が施されているもの　……31

Ⅱ群・・・・・・ロクロ使用のもの（切り離しは全て回転糸切り）

Ａ群・・・・・・内外面ともミガキ、黒色処理が施されているもの

ａ類・・・・・・底部から胴部の立ち上がりが外反するもの、または段を有するもの ……２

Ｂ群・・・・・・内面にミガキ、黒色処理が施されているもの

ａ類・・・・・・底部から胴部の立ち上がりが外反するもの、または段を有するもの

①口縁部がやや外反するもの　……27

②口縁部が内湾するもの　……21～23・26・28

③口縁部が外傾するもの

ｂ類・・・・・・底部から胴部が滑らかに内湾し立ち上がるもの

①口縁部がやや外反するもの　……24・25

②口縁部が内湾するもの

③口縁部が外傾するもの

C群……内外面ともロクロ痕以外の調整を持たないもの

a類……底部から胴部の立ち上がりが外反するものまたは段を有するもの

①口縁部がやや外反するもの ……30

②口縁部が内湾するもの

③口縁部が外傾するもの

b類……底部から胴部が滑らかに内湾し立ち上がるもの

①口縁部がやや外反するもの

②口縁部が内湾するもの

③口縁部が外傾するもの ……16

・口径1に対する底径比による分類（ロクロ使用のもののみ）

①0.5以上　②0.4～0.5……3・16・23・25　③0.4前後……21・22・24・26・27・30

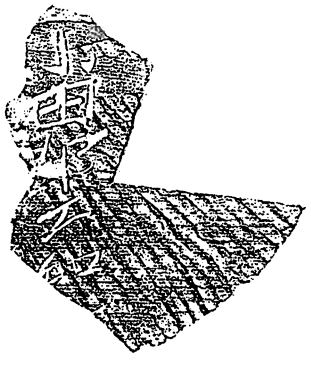
Ⅰ－A群に属するものは、4号住居跡P4から出土した31の1点のみである。Ⅱ－A群に属するものは5の1点のみ掲載した。底部のヘラミガキは、中央から外に放射状に広がる。他に数点出土しているが全て破片である。出土地点は全て1号住居及びカマドの埋土中である。なお、5は口縁部の残存がないのでその他の細分は省略した。

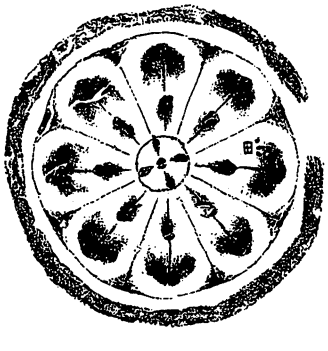
Ⅱ－B群に属するものとして、12点を掲載した。胎土に細砂、金雲母を含むものが多く、ほとんどが3号住居跡からの出土である。

Ⅱ－C群に属するものとしては2号住居出土の16、3号住居埋土中出土の30がある。ただし、それぞれの部位が残存していないもの1～3についての細分は省略した。

遺物の時期は、Ⅰ－A群は8世紀代・奈良時代に属するもの、Ⅱ群に属するものは全て口径1に対する底径比が0.5以下であることから、9世紀代後半から10世紀初頭に属するものと考えられる。

また、ⅡB群a類②に属する坏のうち2点（22・23）には「小田」が刻書してある。「小田」に関する遺物はこれまでに多賀城発掘調査（宮城県）で昭和48年度出土の「小田郡･･･」と刻まれた須恵器を初め、「小田」の文字が入った瓦などいずれも多賀城跡から5点出土している。この多賀城跡出土の「小田」についてはかつて宮城県北部に存在した小田郡に由来するものであるという。当時の小田郡は現在の遠田郡涌谷町付





第25図　多賀城跡出土遺物

近と考えられている。今回の発掘で出土した坏に施された「小田」の刻書が人名、出身地等何に係わるものか、また、多賀城跡出土のものと同様に小田郡に係わりを持つものかどうかは不明である。

＜鉢＞

１点のみ口縁部から胴部にかけての土器片が出土した（９）。口縁部と胴部の傾きから鉢とした。埋土中からの出土である。体部上部には炭化物が付着しており、煮炊きに使われた跡が見られる。胴部には、須恵器によく見られる器面調整の叩き目が見られる。器種、文様は相違するが本遺跡出土のものと同様に叩き目のある土師器は近隣の遺跡では、白幡林遺跡（石鳥谷町）Ｂ－２、Ｂ－３住居跡出土の長胴甕、石持Ｉ遺跡（花巻市）第23号土坑・埋土出土の甕がある。

＜甕＞

９点掲載した。そのうち、胴部中央に膨らみを持つものを球胴甕（20）、器高20cm程度のものを小型甕（４・17・18）とし、他は長胴甕（５～８・19）として分類した。

Ｉ群……ロクロ未使用のもの
　Ａ群……頸部に段を持つもの
　　①最大径を口縁部に持つもの　……17
　　②胴部に最大径を持つもの　……６・８・20
　Ｂ群……頸部に段を持たないもの
　　①最大径を口縁部に持つもの　……18・19
　　②胴部に最大径を持つもの　……５
Ⅱ群……ロクロ使用のもの
　Ａ群……頸部に段を持つもの
　　①最大径を口縁部に持つもの
　　②胴部に最大径を持つもの
　Ｂ群……頸部に段を持たないもの
　　①最大径を口縁部に持つもの　……４
　　②胴部に最大径を持つもの

・長胴甕

全てＩ群に属する。最大径を口縁部に持つものは２号住居跡から出土、最大径を胴部に持つものは１号住居跡からの出土である。ただし口縁部の残存しない７については除いている。

・小型甕

３点出土している。Ｉ－Ａ群に属するものが２点、Ⅱ－Ｂ群に属するものは１点である。Ｉ－Ａ群に属するものは２号住居跡からの出土でどちらも胴部外面はヘラケズリ、口縁部はヨコナデ調整である。17は胴部内面がハケメ、18はヘラナデ調整が施してあり口縁部はともにヨコナデである。Ⅱ－Ｂ群に属するものは１号住居跡から出土している。外面は凹凸状のロクロナデが確認されるのみである。

・球胴甕

２号住居跡から出土した１点のみである。

Ⅱ群の甕は、９世紀以降に属するもので、１号住居跡出土の４が該当する。ロクロナデを主体とすることから時期は９世紀後半から10世紀初頭に属する可能性が高い。したがって１号住居出土のロクロ未使用の長

胴甕もこの時期に属するものと思われる。２号住居跡出土の球胴甕はヘラケズリ後ヘラナデ、ヘラミガキと他の出土甕に比べ調整が丁寧に感じられる。また、同住居跡から出土した甕は口縁部ヨコナデ、胴部はハケメ、ヘラケズリによる調整が目立つ。小型甕も１号住居のものとは異なりロクロ未使用である。これらは８世紀に属する可能性が高い。

＜壺＞

４号住居跡から32の１点が出土している。ロクロ使用で外面がやや剥離しているものの滑らかで、内面にはヘラミガキが施してある。

（５）鉄滓

１号住埋土下方から４点出土している。鉄滓の色調、形態から判断すると古代の鍛冶に係わる遺物と思われる。種別は流動滓２点、鍛冶滓１点、含鉄滓１点である。種別の分類はTaJIma製マグネット吸着器「ピックアップ」による磁着度とMETAL　CHECKER（メタルチェッカー）の反応による。磁着せず、メタルチェッカーにも反応しないものを流動滓、磁着せず、メタルチェッカーにも反応しないがわずかに磁石に引きを感じるものを鍛冶滓、磁着はするがメタルチェッカーに反応しないものを含鉄滓と分類している。これらの鉄滓は埋土中からの出土で遺構に伴うものかどうかは不明であるが、近隣で鍛冶が行われていたことを示す資料であるといえる。

（６）刀子

１号住居埋土中から鉄滓と共に１点出土した。かなり腐食が進んいる。埋土中からの出土で遺構に伴うものかどうかは不明であるが、平安時代のものである可能性が高い。

２．遺構

＜竪穴住居跡＞

調査区の中央に２棟、南側に２棟検出した。出土土器及び十和田ａ降下火山灰を基準に時期と新旧関係を推定し、検出した４棟のうち、２号住居跡は奈良時代に、１・３・４号住居跡は平安時代に属するものと判断した。

（１）２号竪穴住居跡から出土した甕は８世紀のものと考えられる。２号住居カマド右袖上部からは９世紀後半のものと思われる坏が出土しているが、住居廃絶後に流れ込んだ可能性も考えられる。土坑、床面からの出土した甕をこの住居使用時と同時期のもの考え、２号竪穴住居は８世紀（奈良時代）に属する可能性が高いものと考える。

（２）１号竪穴住居跡から出土した遺物は９世紀後半から10世紀初頭のものである。また、住居埋土中から９世紀後半から10世紀初頭と思われる３号住居出土の坏と類似のものが出土していることと、住居の埋土中に火山灰の堆積が見られないことから１号住居跡は３号住居跡よりも古いと考えられる。９世紀後半～10世紀初頭（平安時代）に属するものと考える。

（３）４号住居の柱穴状ピット（Ｐ４）から出土した坏は、８世紀代のものと思われる。土坑から出土した壺はロクロ使用で細かなミガキ調整があることから９世紀後半のものと思われる。土坑を住居施設と考え、４号住居跡は９世紀後半（平安時代）のものと考える。

（４）３号住居の土坑内から重なって出土した坏は、住居使用時期と同一時期に使用された可能性が高く、これらの出土遺物は９世紀後半から10世紀初頭に属するものである。したがってこの住居は平安時代に属するものと考えられる。

（5）住居の新旧関係は、２号住居跡が最も古く、１号住居跡、３号住居跡と続く。４号住居跡については資料が乏しく、３号住居跡より古いものと思われるが、１号住居跡との新旧関係は分からない。また、出土遺物、埋土等の状況を顧慮すると１号住居跡と４号住居跡、あるいは３号住居跡と４号住居跡が同時期に使用されていた可能性は高い。

住居の特徴についてまとめると、平面形はいずれも隅丸方形を基調とし、規模は、奈良時代のものが３ｍ程度、平安時代のものは３ｍ程度のもの１棟と５ｍ程度のもの２棟である。

貼り床は１、２、４号住居跡の３棟から検出されており、奈良時代、平安時代ともに確認されている。

カマドは、奈良時代のものが北壁側に平安時代のものが東壁側に位置している。袖部は奈良時代のものは地山を削り出して構築されており、平安時代のものはシルト質土を構築土としている。煙道は平安時代のものは壁から煙り出し部へ緩やかに傾斜しており、底面は平坦である。調査区南側の２号住居跡と４号住居跡の２棟は大きく削平されており、４号住居跡では煙道やカマドの袖が全く確認されていない。また、２号住居においてもは煙道部がかなり削平されており、全様は確認できなかった。

貯蔵穴と思われる土坑はカマド脇に存在し、奈良時代では左側、平安時代では右側に検出されている。

柱穴状遺構は４号住居跡から13基確認されているが住居に伴うものかどうか不明である。

以上から本遺跡の住居は時代と共にカマドは北側から東側へ、袖は削り出し型から構築型へ、土坑はカマド左脇から右脇と変化しているものと思われる。

３．おわりに

今回の調査では稲荷遺跡は、縄文時代には狩猟域の一部として、奈良時代と平安時代には集落としての性格を持つ遺跡であることが明らかになった。現状は畑地と水田で造成による攪乱のため遺跡の一部が消失した可能性が高い。調査に先立って行われた岩手県教育委員会による試掘調査では周辺に住居状遺構も確認されており、さらに集落域が拡大するものと思われる。また、胴部に叩き目のある土師器や「小田」の刻書土器等興味深い資料も出土しており、今後周辺遺跡の調査が進むとさらに生活様式、土地利用等が明らかになると思われる。

＜参考・引用文献＞

石鳥谷町教育委員会（1994）：「白幡林遺跡発掘調査報告書」
工藤雅樹（2000）：「古代蝦夷」株式会社吉川弘文館
西野　修（1998）：第24回古代城柵官衛遺跡検討会資料集「東北地方の古代集落　第３分冊」
古代城柵官衛遺跡検討会
伊藤博幸（1998）：第24回古代城柵官衛遺跡検討会資料集「東北地方の古代集落　第３分冊」
古代城柵官衛遺跡検討会
熊谷常正　他（1982）：「岩手の土器」　岩手県立博物館
宮城県教育委員会・多賀城跡調査研究所（1980）：「多賀城跡　政庁跡　図録編（PL.67C）」
宮城県多賀城跡調査研究所（1973）：宮城県多賀城跡調査研究所年報1973
「多賀城跡昭和48年度発掘調査概報」涌谷町教育委員会「涌谷町史」涌谷町
岩手県教委員会（1979）：「東北新幹線関係埋蔵文化財調査報告書Ⅱ（大曲遺跡）」
岩手県文化財調査報告書第34集
岩手県教委員会（1979）：「東北新幹線関係埋蔵文化財調査報告書　（高畠遺跡）」
岩手県文化財調査報告書第37集
岩手県教育委員会（昭和56年）：「東北縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書」
岩手県文化財調査報告書第56集

㈶岩手県埋蔵文化財センター（昭和61）：「万丁目遺跡発掘調査報告書」岩埋文調査報告書第102集
㈶岩手県埋蔵文化財センター（昭和61）：「古館Ⅱ遺跡発掘調査報告書」岩埋文調査報告書第103集
㈶岩手県埋蔵文化財センター（1998）：「庫理遺跡発掘調査報告書」岩埋文調査報告書第302集
㈶岩手県埋蔵文化財センター（2000）：「似内遺跡発掘調査報告書」岩埋文調査報告書第344集
㈶岩手県埋蔵文化財センター（2000）：「狼沢Ⅱ・髙松寺・上駒板遺跡発掘調査報告書」　岩埋文調査報告書第319集
㈶岩手県埋蔵文化財センター（2001）：「石持Ⅰ遺跡発掘調査報告書」岩埋文調査報告書第341集

第２表　遺物観察表①（土師器・須恵器）

番　号	仮番号	出　土　位　置	品種 残存状況	外　面　調　整 内　面　調　整	法　量（cm） 口径	器高	底径	備　考	分　類	図　版	写　真
1	20	１号竪穴住居跡床面	土師器・坏 底部	黒色処理				ロクロ 回転糸切り		9	7
2	5a	１号竪穴住居跡カマド	土師器・坏 底部	ヘラミガキ　黒色処理 ヘラミガキ　黒色処理		(2.5)	5.0	ロクロ 回転糸切り	ⅡＡ①	9	7
3	4a	１号竪穴住居跡埋土	土師器・坏 1/4以上	ロクロナデ ヘラミガキ　黒色処理	(13.8)	5.2	(6.4)	ロクロ 回転糸切り		9	7
4	7	１号竪穴住居跡カマド	土師器・甕 完形	ロクロナデ ヘラナデ　ヨコナデ	12.7	10.6	7.7	底部再調整	ⅡＢ①	9	7
5	27	１号竪穴住居跡カマド	土師器・甕 胴部～口縁	ヘラナデ　ヨコナデ ヘラナデ　ヨコナデ	(21.8)	(25.0)		非ロクロ	ⅠＢ②	9	7
6	25	１号竪穴住居跡土坑	土師器・甕 胴部～口縁	ヘラナデ　ヨコナデ ヘラナデ　ヨコナデ	(24.6)	(22.1)		非ロクロ	ⅠＡ②	9	7
7	26	１号竪穴住居跡土坑	土師器・甕 底部	ヘラナデ ヘラナデ		(10.5)	(11.7)	非ロクロ		9	7
8	29	１号竪穴住居跡土坑	土師器・甕 胴部～口縁	ヘラナデ　ヨコナデ ヘラナデ　ヨコナデ	26.2	32.4	(11.0)	非ロクロ	ⅠＡ②	10	7
9	3a	１号竪穴住居跡埋土	土師器・鉢 胴部から上	タタキメ　ヘラケズリ　ヨコナデ 当て具　ヨコナデ				非ロクロ		10	8
16	18	２号竪穴住居跡カマド上面	土師器・坏 完形	ロクロナデ	13.3	4.0	6.1	ロクロ 回転糸切り	ⅡＣb③	14	8
17	6a	２号竪穴住居跡床面	土師器・甕 2/3以上	ケズリ　ヨコナデ ハケメ　ヨコナデ	13.4	12.9	7.5	非ロクロ 木葉痕	ⅠＡ①	14	8
18	21	２号竪穴住居跡床面	土師器・甕 胴部1/3	ケズリ　ヨコナデ ヘラナデ　ヨコナデ	13.8	(6.0)		非ロクロ	ⅠＢ①	14	9
19	28	２号竪穴住居跡カマド	土師器・甕 1/3以上	ハケメ　ヨコナデ ハケメ	(21.8)	29.1	9.2	非ロクロ 木葉痕	ⅠＢ①	14	9
20	24	２号竪穴住居跡土坑	土師器・甕	ヘラナデ　ヘラケズリ　ヘラミガキ ヘラナデ　ヨコナデ	22.2	31.1	9.2	非ロクロ	ⅠＡ②	14	9
21	8	３号竪穴住居跡土坑	土師器・坏 完形	ロクロナデ ヘラミガキ　黒色処理	15.0	4.8	5.8	ロクロ 回転糸切り	ⅡＢa②	17	9
22	9	３号竪穴住居跡土坑	土師器・坏 完形	ロクロナデ ヘラミガキ　黒色処理	14.5	4.7	6.0	ロクロ　刻書 回転糸切り	ⅡＢa②	17	9
23	10	３号竪穴住居跡土坑	土師器・坏 1/2以上	ロクロナデ ヘラミガキ　黒色処理	14.2	5.1	6.4	ロクロ　刻書 回転糸切り	ⅡＢa②	17	9
24	11	３号竪穴住居跡土坑	土師器・坏 1/2以上	ロクロナデ ヘラミガキ　黒色処理	(14.5)	4.6	5.8	ロクロ 回転糸切り	ⅡＢb①	17	9
25	12	３号竪穴住居跡土坑	土師器・坏 1/2以上	ロクロナデ ヘラミガキ　黒色処理	14.4	4.6	6.8	ロクロ 回転糸切り	ⅡＢb①	17	10

第２表　遺物観察表①（土師器・須恵器）

番　号	仮番号	出　土　位　置	品種 残存状況	外　面　調　整 内　面　調　整	法　量（cm） 口径	器高	底径	備　考	分　類	図　版	写　真
26	13	３号竪穴住居跡土坑	土師器・坏 1/3以上	ロクロナデ ヘラミガキ　黒色処理	(13.8)	4.6	5.2	ロクロ 回転糸切り	ⅡBa②	17	10
27	14	３号竪穴住居跡土坑	土師器・坏 1/3以上	ロクロナデ ヘラミガキ　黒色処理	(14.2)	4.7	5.0	ロクロ 回転糸切り	ⅡBa①	17	10
28	16	３号竪穴住居跡	土師器・坏 底部	ロクロナデ ヘラミガキ　黒色処理		(1.2)	(5.6)	ロクロ 回転糸切り	ⅡBa②	17	10
29	15	３号竪穴住居跡埋土	土師器・坏 底部	ロクロナデ ヘラミガキ　黒色処理		(1.1)	5.4	ロクロ 回転糸切り		17	10
30	17	３号竪穴住居跡埋土	土師器・坏 1/2以上	ロクロナデ	(14.6)	5.9	6.2	ロクロ 回転糸切り	ⅡCa①	17	10
31	19	４号竪穴住居跡Ｐ４	土師器・坏 2/3以上	ヘラケズリ　ヘラナデ ヘラミガキ　黒色処理	(13.0)	4.8		非ロクロ	ＩＡ	22	10
32	22	４号竪穴住居跡土坑	土師器・壺 2/3以上	ロクロナデ　ヘラナデ ヘラナデ　ヘラミガキ	(11.8)	(13.8)		ロクロ		22	10
33	6b	調査区西側中央	須恵器・甕 胴部破片	タタキメ 当て具						24	10

第３表　遺物観察表②（縄文土器）

番　号	仮番号	出　土　位　置	品　種	文様・特徴	地　文	内面調整	胎　土	備　考	図　版	写　真
10	1a	１号竪穴住居跡埋土	深　鉢		ＲＬ横位		粗砂粒含む		10	8
11	2a	１号竪穴住居跡埋土	深　鉢		ＲＬ横位		粗砂粒含む		10	8
34	23	調査区南東隅	小型鉢		ＬＲ横位		砂粒含む	口縁部に刻み	24	10

第４表　遺物観察表③（鉄製品）

番　号	仮番号	出　土　位　置	器　種	長さ cm	幅 cm	厚さ cm	重さ g	備　考	図　版	写　真
12	5b	１号竪穴住居跡埋土	刀　子	14.1	2.3	0.9	30.2		11	8

第５表　遺物観察表④（鉄　滓）

番　号	仮番号	出　土　位　置	品　種	最大長 cm	厚さ cm	重さ g	色　調　　備　考	写　真
13	3b	１号竪穴住居跡埋土	流動滓	5.4	0.3～2.0	18.4	暗赤褐色から褐灰　磁着しない	8
14	2b	１号竪穴住居跡埋土	流動滓	5.0	0.5～2.2	16.1	暗赤褐色から褐灰　磁着しない	8
15	4b	１号竪穴住居跡埋土	鍛冶滓	4.2	0.5～1.4	17.5	暗赤褐色から褐灰　磁石にわずかに反応する	8

第６表　遺物観察表⑤（石　器）

番　号	仮番号	出　土　位　置	器　種	長さ cm	幅 cm	厚さ cm	重さ g	備　考	図　版	写　真
35	1b	調査区南西隅	石　鏃	(2.5)	1.3	0.3	0.8	頁岩、先端部欠損	24	10

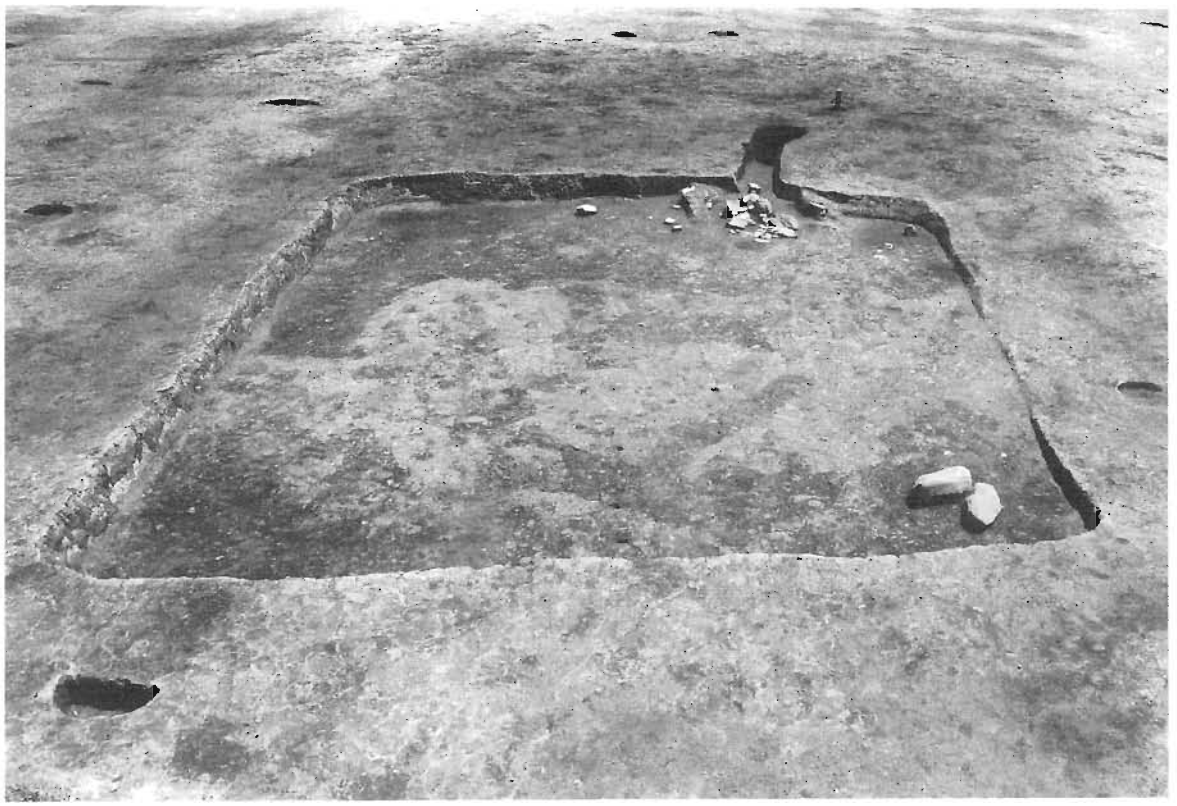
写　真　図　版

調査前風景

調査後風景（北→）

調査後風景（北東→）

写真図版１　調査前風景・調査後風景



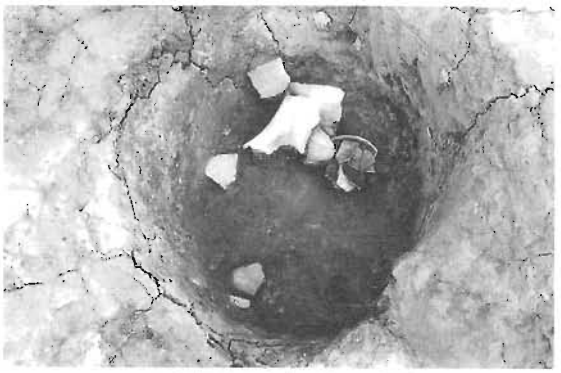
1号竪穴住居跡　平面

カマド　完掘

写真図版２　１号竪穴住居跡

1号竪穴住居跡　土層断面（北南）

1号竪穴住居跡　カマド土層断面（北南）

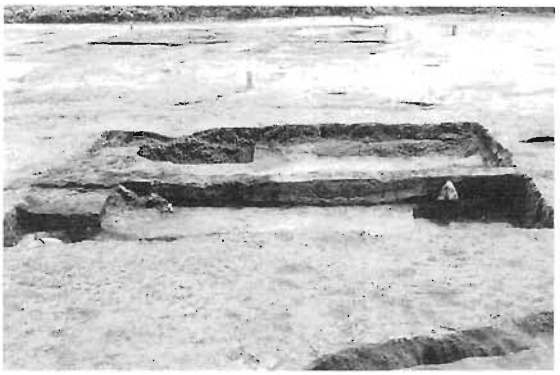


1号竪穴住居土坑　完掘

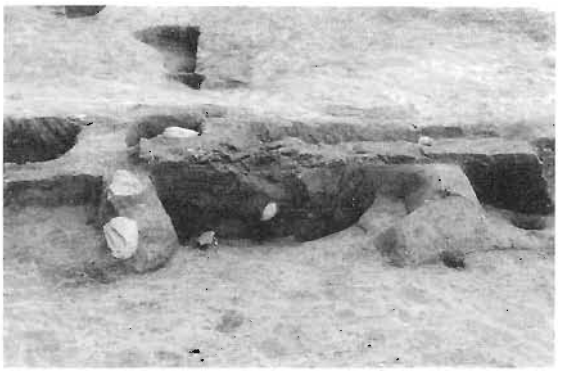
1号竪穴住居跡　カマド土層断面（東西）

2号竪穴住居跡　平面

写真図版3　1・2号竪穴住居跡



土層断面（北南）



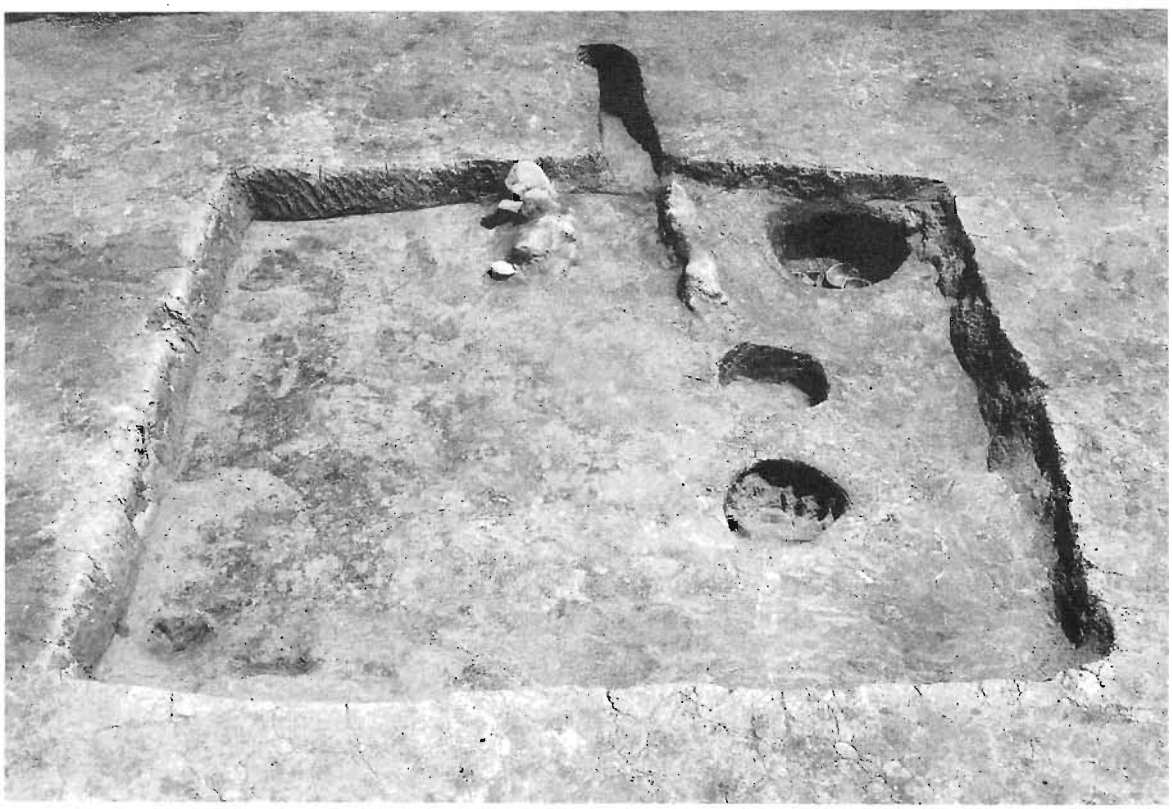
カマド土層断面（西東）

遺物出土状況

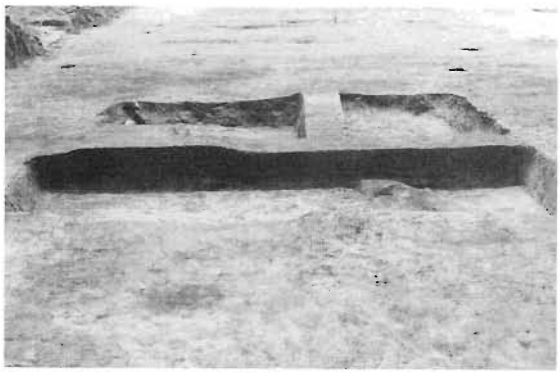
甕出土状況

遺物出土状況

写真図版４　２号竪穴住居跡

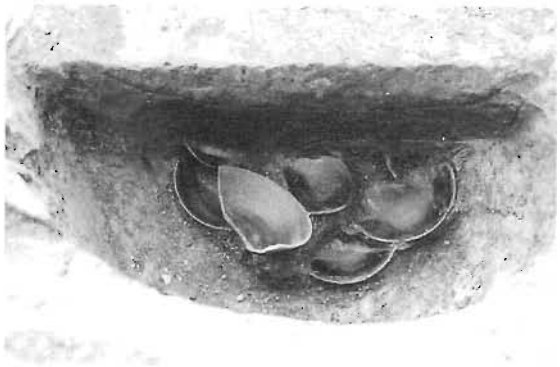


3号竪穴住居跡　平面

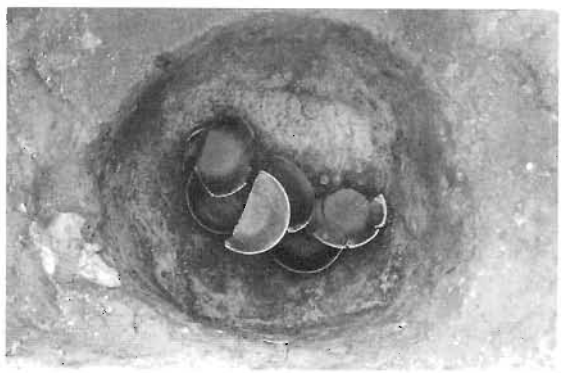


土層断面（東西）

カマド土層断面（北南）

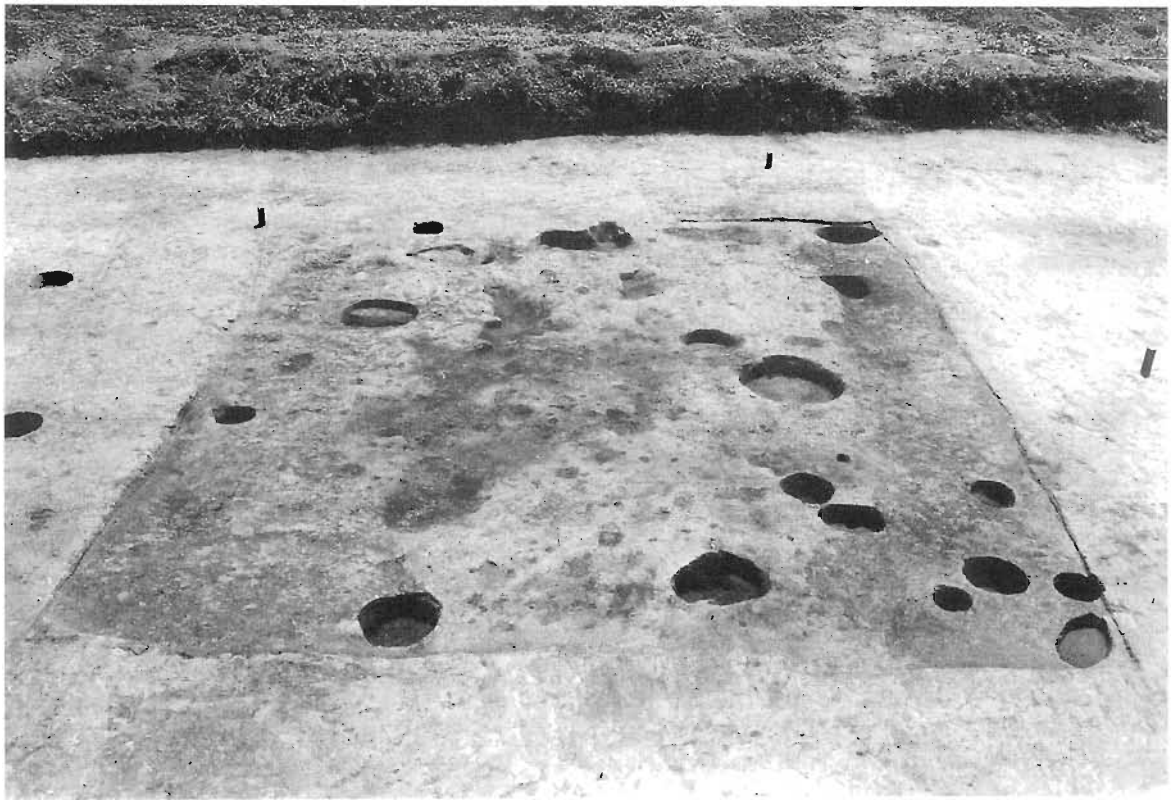


遺構内土坑土層断面

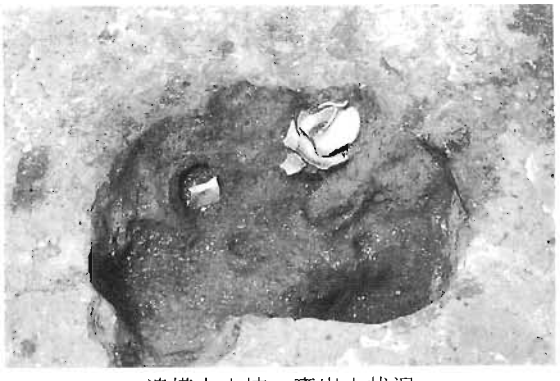


土坑完掘と坏出土状況

写真図版5　3号竪穴住居跡

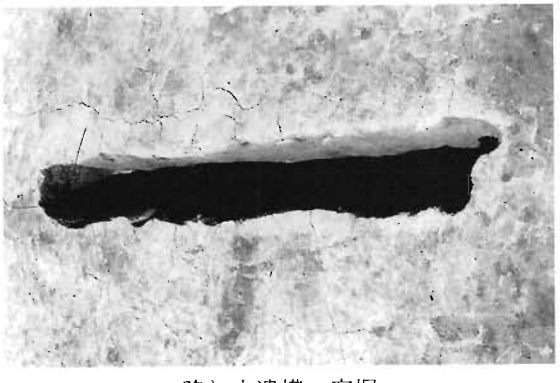


4号竪穴住居跡　平面



遺構内土坑　甕出土状況

1号土坑　完掘



陥し穴遺構　完掘

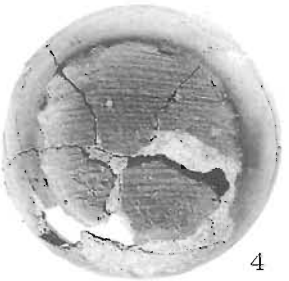
2号土坑　完掘

写真図版6　4号竪穴住居跡・土坑・陥し穴状遺構

1

2

3


4

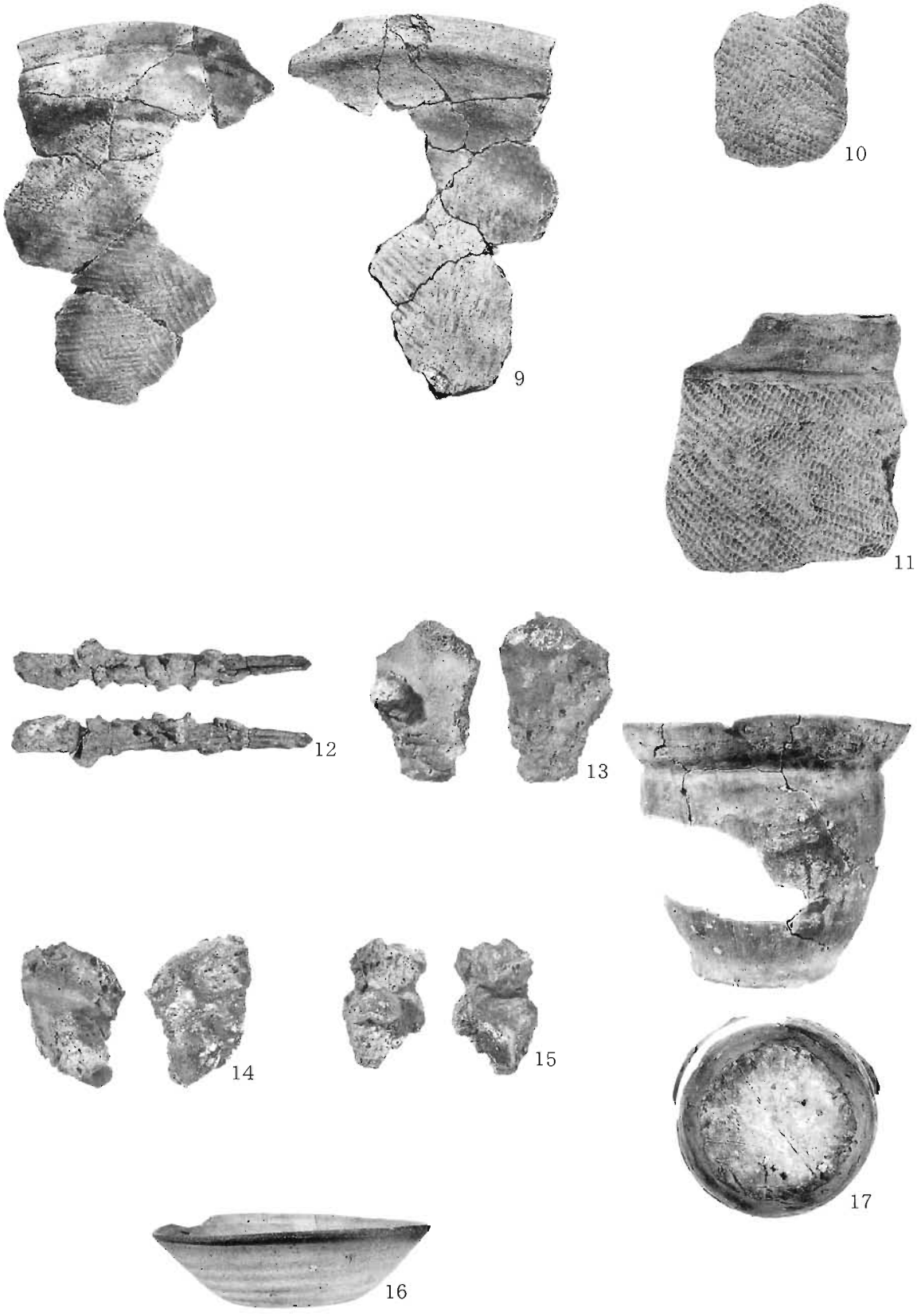
5
S=1/4

6
S=1/4

8
S=1/4

7
S=1/4

写真図版７　出土遺物(1)



写真図版 8　出土遺物(2)

18

20
S=1/4

19
S=1/4

21

22

23

24

写真図版９　出土遺物(3)

25

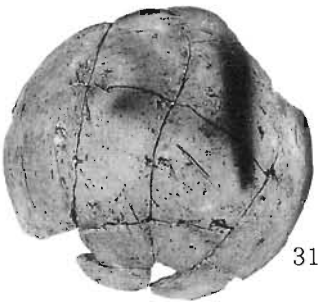
26

27

28

29

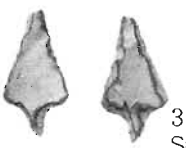
30


31

32

33

34


35
S=2/3

写真図版10　出土遺物(4)

報告書抄録

ふりがな	いなりいせきちょうさほうこくしょ
書名	稲荷遺跡調査報告書
巻次	
シリーズ名	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第408集
編集者名	星　幸文、村木　敬
編集機関	(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
所在地	〒020-0853　岩手県盛岡市下飯岡11-185　TEL 019-638-9001　FAX 019-638-8563
発刊年月日	西暦2002年

ふりがな	いなりいせき
所収遺跡名	稲荷遺跡
ふりがな	いわてけんひえぬきぐんいしどりやちょうやえはた
所在地	岩手県稗貫郡石鳥谷町八重畑76ほか
コード	市町村　03342　　遺跡番号　ＭＥ07 - 2078
北緯	39°26′05″
東経	14°110′00″
調査期間	平成13年６月18日～７月31日
調査面積	2,090㎡
調査原因	ほ場整備事業に伴う緊急発掘調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
稲荷遺跡	散布地 集落	縄文 奈良 平安	陥し穴状遺構　1 竪穴住居　4 土坑　2	縄文土器 (晩期中葉以降) 石鏃（縄文） 土製品（古代） 土師器 須恵器 鉄製品 鉄滓	刻書土器２点出土

平成14年度　㈶岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター職員名簿

所　　長　木村　昇

副　所　長　高橋　正儀

【管　理　課】

課　長	韮澤　正吾
課長補佐	山崎　善光
〃	山岸　直美
主　査	中嶋　賢一
嘱　託	高橋　照雄
〃	加藤　美代子
〃	湯沢　邦子
〃	伊藤　滋子

【調査第一課】

課　長	佐々木　勝
課長補佐	佐々木　清文
〃	高橋　義介
文化財専門員	小山内　透
文化財調査員	吉田　充
〃	亀　大二郎
〃	佐々木　信一
〃	早坂　淳
〃	小松　則也
〃	金野　進
〃	野中　真盛
〃	金子　昭彦
〃	阿部　孝明
〃	阿部　勝則
〃	羽柴　直人
〃	高木　晃
〃	長村　克稔
〃	星　幸文
〃	杉沢　昭太郎
〃	村上　拓
〃	本多　準一郎
〃	青山　紀和
〃	西澤　正晴
〃	村木　敬
〃	福島　正和
〃	北村　忠昭
〃	八木　勝枝
〃	米田　寛
〃	丸山　浩治
〃	北田　勲
〃	島原　弘征
〃	中村　絵美
期限付調査員	坂部　恵造
〃	袰地　剛
〃	玉山　健一
〃	吉田　真由美
〃	小林　弘卓
〃	木村　ひかり
〃	藤原　大輔
〃	川又　晋
〃	太田代　一彦
〃	江藤　敦
〃	立花　公志

【調査第二課】

課　長	高橋　與右衛門
課長補佐	中川　重紀
文化財専門員	金子　佐知子
文化財調査員	赤石　登
〃	阿部　眞澄
〃	飯坂　一重
〃	鈴木　裕明
〃	久慈　泰彦
〃	濱田　宏
〃	安藤　由紀夫
〃	星　雅之
〃	佐藤　淳一
〃	半澤　武彦
〃	皆川　英香
〃	溜　浩二郎
〃	丸山　直美
期限付調査員	齋藤　麻紀子
〃	吉田　里和
〃	菊池　賢
〃	立花　裕
〃	駒木野　智寛
〃	原　美津子
〃	石崎　高臣

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第408集

稲荷遺跡発掘調査報告書

八重畑地区ほ場整備事業関連遺跡発掘調査

印刷　平成14年８月22日
発行　平成14年８月30日

発行　㈶岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
〒020-0853　岩手県盛岡市下飯岡11-185
電話（019）638－9001
FAX（019）638－8563

印刷　第一印刷有限会社
〒020-0122　岩手県盛岡市みたけ四丁目6-40
電話（019）646－6001

© ㈶ 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター　2002